

志

落小 合峯 直大 文羽 著画



少年讀本 第四十八編

本居宣長

吉田

121.52 毛



音画  
大正

本居宣長

少年讀本  
第四拾八編

# 本居宣長



落合直文著

小峯大羽畫

志き志まのやまと心を人とはば

朝日みにほふ山ざくら花

こはこれ、本居宣長翁の歌にあらずや。凡そ日本の人にして、この歌を知らざるものはなからむ。この歌をめでざるものはなからむ。そは、この歌のころこそば、ただに、めでたきのみにあらず、この三十一字にして、よく、わが大和心をうたひつくし、よく、わが大





和魂を發揮したればなり。  
 そもそも、大和心とは、何ぞや。即ち、世にいふ大和魂のここに於て、われわれ日本人が、遠つ祖より、うけ得たる氣象をいふなり。君のためには、身をすて、國のためには、家をかへりみざる精神をいふなり。その氣象や、その精神や、もごより、かたちなきものなり。されど、われわれ日本人が、いだける氣象と精神とに、ほかならざれば、われわれ、みづから、心あづかに考ふる時は、その心、その魂の、いかなるものなるか、おのづから、明かなるものあらむ。  
 このかたちなき大和心を、かたちあるものもて、形容せしは、この歌をはじめとす。この歌の形容は、われわれが、いだける大和心を、よく形容し得たりや、あらずや。試みに、こをうたひて見よ。わが氣象、わが精神、おのづから、この歌のうちに、躍如たるにあらずや。

かの朝日の、のぼるを見よ。まここに、きよく、まここに、ほがらかなり。かの山ざくらの、さきにほふを見よ。まここに、うるはしく、まここに、いさぎよし。これやがて、われわれの、いだける氣象精神なり。この氣象をもて、君につかへむか、たれか、忠義の人たらざらむ。この精神をもて、國につくさむか、たれか、愛國の人たらざらむ。ただ、そのみにもあらじ、げにや、朝日にほふ花のさかりは、こまもろこしは、いふも更なり。西のはてなる外國までも、ふくはる風の、にほひわたりて、おのづから、大和心になびきふしなむ。  
 かくの如く、大和心は、われわれの、いだける氣象精神なり。この精神、氣象ありて、はじめ、大和男兒といふべし。苟も、この氣象、精神を失はむには、大和男兒といふべからず。大和男兒のあらざれば、この大和の國もあらぬなり。さては、この日本國を維持する



ものは、この氣象精神、即ち大和心なり。一たび、この大和心をわすれむか、この氣象精神を失はむか、何を以てか、この國家を維持せむ。されど、世の人、なほ、ややもすれば、心うかれて、そのよるところを知らず。わが大和の花をわすれ、朝日にほひをわすれて、いたづらに、かの外國の花をのみ、めではやさむとするは、いかに。これ、大にかへりみるべきことならずや。

本居翁は、國文學の祖とも、仰がるる人なり。さて、翁の出でられし時勢は、いかなる時勢なりしぞ。當時の社會は、大かた、漢心、佛魂のみをもて、みたまされ、この大和心といふものは、ほごほご、失せはてむごせり。翁、深く、そをなげき、國史に、國文に、つごめて、そをふるひ起し、専ら、この大和心の養成に、心をつくされたりき。さる心ある人の、よみ出でし歌なり。いかでか、めでたからざらむ。その歌の、こ

こしなへに、人といふ人の口のはにのぼるは、また、ゆるよしあり  
 といふべきなり。

漢心あるもの、佛魂あるもの、いかでか、かかる歌をうたひ出でむ。また、世にいふ、かの歌よみといふもの、また、いかでか、かかる歌をよみ得む。かりに、こごばのみは、これよりも、うるはしく、よみいづとするも、かくまでに、大和心を、よく、うたふことは、かたからむ。なにこなれば、漢心あるものは、大和心を知らず。佛魂あるものは、た、同じければなり。また、かの歌よみといふ輩は、多くは、國の歴史を知らぬものなり。國の歴史を知らぬもの、また、いかでか、大和心のよりて來るところを知らむ。されば、この歌の如きは、この翁ならでは、また、うたひいづること、かなはざりしならむ。

翁は、よく、わが國の歴史をあらべられたる人なり。われわれのい



だける、大和心の本體を辨へられたる人なり。歴史上、かかるものを大和心とも、大和魂ともいふなり。よく知られたる人なり。その人の歌なり。わづかに、三十一文字にすぎざれども、實に、その味いふべからざるものあるならむ。あはれ、この歌をよみて、ふるひ起りし人は、そもいくばくぞや。かの王政維新の際、四方に起れる勤王諸士の傳記をよまむには、おもひ半ばにすぐるものあらむ。さて、明治の大御世となりては、よろづ開けにひらけ、進みにすすみ憲法布かれ、國會開かれて、海陸の軍備も、全く、ごごのひぬ。今は、やまご心のさくら花、愈朝日と共、に匂ひ、外國人も、こをめではやさざるものなきに至れり。見よ、かの二十七八年の戦争には、大和男兒の向ふところ、敵なきが如く、四百餘州、忽ち、わが御旗の風になびき従ひしにあらずや。はたまた、去年の聯合軍には、わが軍、つ

ねに、これが先鋒となり、忽ちにして、太沽をくだき、天津をおごし、いれ、北京城頭第一に、朝日の旗をひるがへせるなど、四方の國人、舌をまきて、わがめざましきはたらきを譽めたたりといふにあらずや。これ、他ならず、いはゆる、志き嶋のやまご心の發揚せしなり。なにものか、これに敵せむ。いかなるものか、これに當らむ。あはれ、地下の本居翁、また、以て、冥ぜられたるべし。本居宣長翁は、伊勢國松坂の人にして、家の名を、鈴の屋といひ、後の諡を、秋津彦美豆櫻根大人としたり。その祖先は、桓武天皇より出でたる、平朝臣の一流にして、その遠祖は、池大納言頼盛卿の六世の後にて、本居縣判官平建郷といひける人の末裔なり。さて、建郷の子を、兵部大輔武遠、その子、兵部大輔武秀、その子、左馬助直武といふ。この直武にいたりて、はじめて、伊勢國司從一位



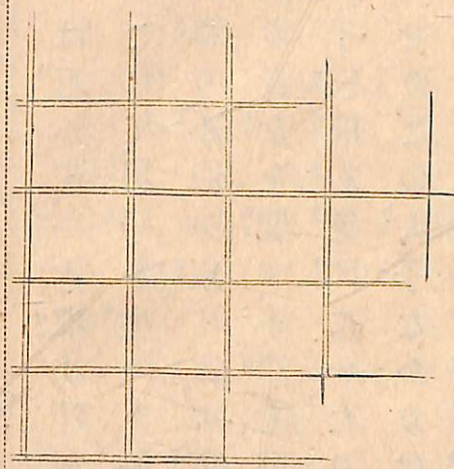
右大臣北畠顯能に仕へたり。直武の子、民部少輔武基といふ。その子、和泉守武久、阿坂城合戦にて、數度の功名をあらはせり。武久より左馬亮武貞、左衛門尉武延、左馬亮武重を経て、兵部大輔武利の頃より、一志郡大阿坂村に住はれきこそ。武利の子、惣助武連、阿坂城の目付たり。左馬助直武より、八世の間、相ついで仕へたり。北畠氏、ここにいたりて、滅びぬ。時に、天正四年十一月なり。さて、武連に二子あり。長男を本居正右衛門延連といひ、次男を同左兵衛武秀といへり。延連は、浪人にて、大阿坂村に住ひ、武秀は、性得勇猛の士なり。しかば、蒲生宰相氏郷に仕へて、戦功あり。後、氏郷に隨ひて、陸奥の會津にいたりて、祿五百石を賜はりぬ。天正十九年、南部九戸の戦に、敵兵あまた討ちこり、遂に、軍中にて失せたり。武秀討死のころは、その室、たまたま、懷妊の身なりしが、そのまま、伊勢國に

歸り、兄延連の家には行かず、一志郡小津村なる油屋源右衛門といふ家に到りて、ここに、男子を生めり。源右衛門、その後、小津村より、飯高郡松坂に移り、小津を以て、家の名とす。かくて、かの男子成長して、源右衛門の長女を娶り、小津七郎衛門と稱し、松坂の魚町に別居せり。その子、三郎右衛門にいたりて、いたく家産をおこし、居を本町にうつせり。この人、子なかりければ、小津喜兵衛の長男をして、その家を嗣がしめ、三四右衛門定治と稱す。定治、また、子なし。小津孫右衛門の次男をもて、養子とす。これを三四右衛門定利といふ。これ、實に、宣長翁の父君なり。さて、定治の長女に、清子といへるあり。小津孫右衛門に嫁せしが、その夫みまかりて、本家に歸りたるを、定利の室とし、同時に、そのうみの子、宗五郎といふをもひきこりて、これを定利の宗領と定む。かくて、清子、享保十三年に、み



まかりければ、松坂の人なる村田孫兵衛豊商の女、勝子をむかへて、後の室ごせられき翁の母君は、これなり。

翁の家、四世の間、かく町人にくだりしごはいへ、江戸に出店なごも數多あるほどにて、ひとわたりの商家にはあらず、世に大家家柄を以て目せられき。父定利、三十五六歳の頃なりごか、嫡嗣宗五郎はあれごも、なほ、自らの子をも欲しごて、大和國吉野に齋きまつれる水分の神に、いのられけるに、果して、そのある



しあり、享保十五年五月七日、夜子の刻こゝろといふに、男子生る。これ、すなはち、宜長翁なり。その幼名を小津富之助といふ。後に、通稱を彌四郎やよごよび、健藏けんざうといひ、舜庵しゆんあんと稱し、終に、中衛ちゆうゑとあらたむ。名は、はじめ、榮





貞まことといひしを、榮な貞まことごよび改あらため、後のちに、宣のり長ながご稱しょうせり。また、寶ほう歷れき二年ねんの頃ころ、姓せい小こ津づをやめて、もこの本もと居なりに復たせられたり。翁おきな八はち歳さいにして、はじめて、西にし村むら三さん郎らう兵へい衛ゑいを師しとして、手て習ならひを始はじめらる。十一じゅういち歳さいの時とき、父ちち君きみ江え戸のの店みせにて失うせられしかば、それよりは、專もっぱら、母はは君きみ勝かつ子この手てひごつにて、育そだてられたり。十二じゅうに歳さいの時とき、齋さい藤とう松しょう菊くに從したがひて、手て習ならひをなし、また、岸きし江え之中ちゆうをたよりて、四し書しょの訓くん讀どくを學まなび、かたはら、猿さる樂がくの謠えう曲きょくをも習ならはれき。十七じゅうしち歳さい、濱はま田だ端たん雪せつに射しゃ術じゆつを學まなび、十九じゅうきゅう歳さい、山やま村むら吉きち衛ゑい門もんより、茶ちやの湯ゆの式しきを授さづかり、二十にじゅう歳さいの時ときより、はじめ、尋じん常じやう體たいの歌うたをよみいでらる。また、この年とし、正せい住じゆう院ゐんの住ぢゆう僧そうに就つきて、五ご經きやうを學まなび、日ひならずして、讀よみをへられぬ。かくて、いよいよ深ふかく、學まなびの道みちに、心こころを寄よせられしは、二十一じゅういち歳さいの頃ころよりなりけり。

これよりさき、寛くわん保ぼ元げん年ねん、翁おきなの父ちち君きみは、かねて嫡ちやく子しに定さだめたる宗そう五ご郎らうに、家いへを嗣ついでがしめ、こを三さん四し右う衛ゑい門もん定さだ治ちと稱しょうしき。この人ひと、江え戸のに下くだりて、紺こん屋や町まちといふに、店みせを開ひらき、いと富ふう貴きに世よを渡わたりしが、寶ほう曆れき元げん年ねん、四し十じゅう歳さいにて失うせられき。男おとこ子こなきにより、翁おきな、遂つひに、そのあこを嗣ついでぐことごはなりぬ。これ、翁おきな二十一じゅういち歳さいの時ときなり。

さて、兄あに君きみ定さだ治ちの世よにあられしは、ごは、何なに事ことも、そのはからひにまかせて、心こころおく事こともなかりしを、俄にわかに失うせられし後は、母はは君きみ勝かつ子こ、自みづから、家いへの事ことごも、なにくれご、はからはざるべからず。且かつ、その頼たのみごせし、隱いん居きやの店みせも、やうやう、衰おとろへゆくを見て、いたく、ゆくさきの事ことごも、思おもひわづらひ、若わかし、かの店みせに、事こともあらば、われ等ら、なにを以もつてか、世よをわたらむ。そのうへ、跡あとつくべき子こは、商あきなひのすぢには、いごうごく、ただ、書しよをよむことごをのみ好このめば、ごても、この子こを商あきなひ人ひとと



なさむことは、思ひもよらず。今より、その心志らひせてはあるべからず。さて、斷然、翁を、京にのぼして、醫師となさしめむ。決せられたり。母君は、實に、賢女にておはせしなり。その時の事どもは、翁の著家の昔物語といふ書に見えたり、すべて、母刀自は、女ながら、男にまさりて、心はかばかしく、ささく、かかかるすちの事事も、甚だ、かしくぞ、おはしけるごなむ。さて、かくおぼしおきてたるも、あるく、いく程もなく、明和元年に、隱居家の店なくなりて、残れる資も、皆あづかれる手代が、わたくしに引きこめしかば、かの家の資も、朝の露ごぞ消え失せぬ。われもし、醫師のわざを始めざらましかば、家の産、絶えはてなましを、母刀自のはからひは、かへすがへすも、ありがたくぞ覺ゆる。

ごあるせり。母君の先見果して、そのあるしあり。翁をして、國文學の祖としも仰がしむるに至らしめしは、これ、ひごへに、母君のたまものごやいはむ。また、同書に、翁の身の上に關し、左の如く、あるされたり。

そもそも、我家の遠つ祖は、上にあるせる如く、數ならざりしかども、むげに、賤き民にもあらず。世世をかさねて、北畠殿に仕まつり、道觀君も、蒲生殿に仕へ給ひて、武士のつらにてありしを、道印君より、道樹君まで、四世の間は、町人といふに下り給ひ、道休君の世より、富み榮え給ひて、ゆたかには、經給ひながら、なほいへば、商人のつらにてありしを、殊に、宣長がいごけなかりし頃などは、家産、やうやうに衰へもてゆきて、貧しくて、經しを、宣長醫師となりぬれば、民間にまじらひながら、醫師は、世に長



袖ごかいふ筋にて、商人のつらをは離れ、殊に、近き年頃となりては、わが君のかたじけなき御惠の蔭にさへ、かくれぬれば、いささか、先祖の志にも立ちかへりぬる上に、物學びの力にて、數多の書ごもを書きあらはして、大御國の道の心を説きひろめ、天の下の人にも知られぬるは、拙く賤しき身の程にござりては、いさを立ちぬと覺えて、皇神たちの惠み、君の惠み、先祖たち、親たちの御たまの、淺からず、たふさくなむ。

又、翁の幼少より、いかに、學びの道にいそしまれしかは、こも、その自著、玉勝間の左の一節にて、明かならむ。

おのれ、幼かりしほどより、書を讀むことをなむ、よろづより、面白く思ひて、よみける。さるは、はかばかしく、師につきて、わざと、學問すこにもあらず、何と志すこともなく、その筋ご定めた

る方もなくて、ただ、ただ、からのやまごの、くさぐさの書を、あるにまかせ、得るにまかせて、古き近きをもいはず、何くれと、讀みけるほどに、十七八なりし頃より、歌よままほしく思ふ心いできて、よみはじめけるを、それは、た、師に従ひて、學べるにもあらず、人に見する事なごもせず、ただ、ひこり、よみ出づるばかりなりき。集ごも、古き近き、これかれと見て、かたの如く、今の世のよみさまなりき。

かくて、寶曆二年、廿三歳の三月、いよいよ、京にのぼりて、堀景山に従ひて、儒學をなし、廿五歳の五月、典藥、武川、幸順、法眼の弟子となりて、醫術を學び、その家塾に寄宿せられたり。さて、翁の國文學に志篤き、醫學、儒學を修むるかたは、ら、つゆ、その研究に怠らず。廿七歳の時、はじめて、難波なる契冲阿闍梨の著せる百人一首改觀抄、



古今餘材抄、勢語臆斷等を見て、大に得るごころあり。これ、翁のいよいよ深く、ふみの山路に分け入らるべき、志をりごなりぬ。そのほどの事ごも、また、玉勝間にあるしあり。

京にありしほどに、百人一首の改觀抄を、人にかりて見て、はじめて、契沖といひし人の説を知り、その世にすぐれたるほどをも知りて、この人の著はしたるもの、餘材抄、勢語臆斷などをはじめ、そのほかも、つぎつぎに求め出でて、見けるほどに、すべて、歌學びのすぢの善き悪しきけちめをも、やうやうに、辨へさざりつ。さるままに、今の世の歌よみの思へるむねは、大かた、心にかなはず、その歌のさまも、をかしからず、おぼえけれど、當時、同じ心なる友はなかりければ、ただ、世の人なみに、ここかしこの會なごにも出でまじらひつつ、よみありさけり。さて、人のよむ

ふりは、己が心には叶はざりけれども、己が立ててよむふりは、今の世のふりにも背かねば、人はごがめずぞありける。

そもそも、契沖ごは何人ぞ。かれ、眞言の僧徒たりしごはいへ、皇國の學を深くきはめ、あまた、發明の書を著して、その名、ごごに高し。水戸光圀卿、そを聞かせ給ひて、感嘆のあまり、まばあば、使をもて召されければ、固く辭して出でず。よりて、斯道に志あつき安藤爲章ごいふ家臣を遣はして、遂に、その門人ごなし給ひぬ。また、更に、萬葉集の注解をご頼まれしかば、すなはち、その請に應じて、代匠記を撰びて奉れり。これ、萬葉學の始めなり。されば、身は僧徒なれごも、その墨染の袖には、魁けし梅が香のほひ、いごゆかしく、やがて、春色、踏蕩、櫻花爛熳の盛況をきたしは、これ、この僧の力多きに居るなり。翁の、その著書を見て、その人を慕はれしも、また、



偶然にあらざるなり。

さて、翁は、京に留まられし事六年。今は、そのむねご學びたる醫術の道も、ほほ、明らめられたれば、これより、郷里松坂にかへりて、小兒科の醫業をもて、家をたてられたり。これ、寶曆七年十月のころにて、廿八歳の時なり。もごより、醫を以て家の業ごなさむは、心まことに好まれしにはあらず。されど、おのれひごり、いさぎよからむごて、親先祖のあごをも、そこなはむは、また、道の本意にあらざれば、力の及ぶかぎりは、産業を、まめやかにつごめて、家をすさめず、落さざらむご、はげまれしなり。

この年、翁は、縣居大人加茂眞淵の著されたる冠辭考を得て、これを深く味ひ、ますます、古學のこころを確められぬ。これより、大人を慕はるること、いと切にして、心ひそかに、これ、わが師なりと、仰が

れたり。玉勝間に、

國にかへりたりし頃、江戸より上れりし人の、近きころ出でたりごて、冠辭考といふものを見せたるにぞ、縣居大人の御名をも、はじめて、知りける。かくて、そのふみ、はじめに、ひごわたり見しには、更に、思ひかけぬ事のみにして、あまり、事ごほく、あやしきやうに覺えて、更に、信ずる心はあざりしかご、猶、あるやうあるべしと思ひて、立ちかへり、今ひとたび見れば、また、立ちかは、實に、さもやご覺ゆる、ふしぶしも出で來ければ、また、立ちかへり見るに、いよいよ、げにご覺ゆること多くなりて、見るたびに信ずる心の出で來つつ、終に、古ぶりのこころごばの、實に、さるごころを悟りぬ。かくて、後に、思ひくらふれば、かの契沖が萬葉の説は、なほ、未だしき説のみぞ多かりける。己が歌學びのあ



りしやう、大かた、かくの如くなりき。さてまた、道の學びは、まづ、はじめより、神書といふすちのもの、古き近き、これやかれやこ讀みつるを、二十ばかりのほごより、わきて、志ありしかご、ごりたてて、わざご學ぶことはなかりしに、京に上りては、わざごも學ばむご、志は進みぬるを、かの契沖が歌、ふみの説になずらへて、皇國の古の意を思ふに、世に神道者といふ者の説く趣は、皆いたく違へりご、早く悟りぬれば、師ごたのむべき人もなかりしほごに、われ、いかで、いにしへのまごごの旨を考へ出でむご、志深かりしに合せて、かの冠辭考を得て、かへすがへす、讀み味ふほごに、いよいよ、志深くなりつつ、この大人を慕ふ心、日にそへて切なり。

ごあり。その冠辭考を得て、一度讀まれしに、わかず。二度三度、なほ、

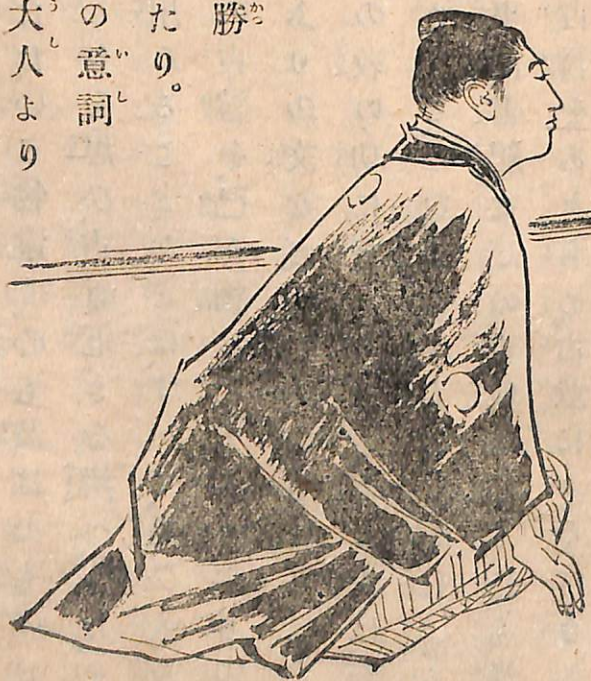
その意おぼろげなり。四度五度ご重ねて、はじめて、その心ごごばの、まごごにさる事なるを、悟られたるなご、その篤志、その熱心、そも、いかにぞや。あはれ、翁、一たび出でて、遂に、我國文學を復古せられたる、まごごに、そのいはれありごいふべからむ。

寶曆十三年五月、縣居大人は、田安殿の仰せごごを蒙りて、伊勢、大和、山城なご、ごこかしご、名所舊跡をはじめ、くさくさの事物を調べたただされし道のついでに、この松坂の里にも、二日三日ごごまられたるを、翁は、その事、夢にも知られざりき。後に聞きて、いご口惜しく思はれしが、そのかへるさ、また、一夜ごごにやごられたり。それご聞きし、翁のよろこび、いかなりけむ。いそぎ、そのやごりにもうでて、はじめて、大人にまみえられぬ。ここに、名簿を奉りて、その弟子ごならぬ。この時、大人は六十七歳翁は三十四歳なり。





そもそも、縣居大人は、古學  
 の祖にして、著書百卷、漢意  
 佛意を、清くはらひすて、  
 まことの道を明らめむご  
 つこめたる、古今獨歩の人  
 傑なり。本居翁の、年久しく  
 慕ひ尊び、待ちつけて、その師  
 と仰がれたる、また、宜なり玉勝  
 間には、左の如く、たたへられたり。  
 漢意を清く離れて、専ら、古の意詞  
 を尋ぬる學問は、わが縣居大人より  
 ぞ始まりける。この大人の學の、まだ





起らざりしほどの世の學問は、歌も、ただ、古今集より以來にのみ止まりて、萬葉集などは、ただ、いそ物遠く、心も及ばぬものとして、更に、その歌のよきあしきを思ひ、古き近きを辨へ、また、その詞を、今の己が物として用ゐることなどは、すべて、思ひも及ばざりし事なるを、今は、その古言を、己が物として、萬葉ぶりの歌をもよみ出で、いにしへぶりの文などをさへ、書き得ることとなれるは、全く、この大人の教の功にぞありける。今の人は、おのれ自ら得たるごと思ふめれご、みな、この大人の御蔭によらずごいふことなし。また、古事記、書紀などの古典を、伺ふにも、漢意に惑はされず、先づ、専ら、古言をあきらめ、古意によるべきことを、人みな知れるも、この大人の萬葉の教の御賜にぞありける。そもそも、かかる尊き道をひらきはじめられたる勤めは、世

にいみじきものなりかし。

もごより、非凡の本居翁にして、この古今獨歩の大人を師とあたる、これまことに、蛟龍の雲雨を得たりごやいはむ。また、大人の活眼、いかでか、この翁を、よのつねの人ごや思はるべき。江戸に歸りて後、その高弟あまたを集へて曰く、こたび、伊勢にて、松坂の里なる醫師本居舜庵、名を宣長といふ人、わが學風をあたひて、をしへ子となれり。この人、年若けれご、志厚く正しく、學廣く、考深く、才ありて、ををしく、物に堪ふる人にて、末いさたのもしく、わが志を繼ぎて、皇御國の大道を釋き、君臣の名分を正し、内外の尊卑を明かにし、皇國學を世に敷きみて、人は、この宣長をおきては、あらじこそ思ふ。今われ、わが志を繼ぎて、わが學を世に示すべき教子を得たる、その祝宴を、今日なすなりご、語られたりごぞ。當時、大人の



ければ、今より怠ることなく、いそしみ學びなば、その心ざし、こ  
ぐることあるべし。ただし、世の中の物學おごもがらを見るに、  
皆、ひきき所を経ずして、まだきに、高き所に登らむとするほど  
に、ひきき所をだに得ること能はず。まして、高き所は得べきや  
うなければ、皆、ひがここのみすめり。この旨を忘れず、心に志め  
て、先づ、ひきき所より、能くかためおきてこそ、高き所には登る  
べきわざなれ。わが未だ神の御ふみをえ説かざるは、専ら、この  
ゆるぞ。ゆめ、階級をこえて、まだきに、高き所をな望みそ。  
こ、いさねもごろに、ささされたること、こも、玉勝間にあるしあり。  
縣居大人の、はじめより、翁に、望をかけられしことの、いみじきこ  
と、これにて思ひやられなむ。  
これより、翁は、ますます、奮ひて、皇國の學に心をつくし、夜こなく、

もごには、干蔭、春海、魚彦、宇萬伎をはじめ、文に、歌に、漢學に、諸藝に  
すぐれたる人、あまたある中に、本居翁を、一度あひみて、かくしも  
思ひ定められしなご、その眼識おごろくべきにあらずや。  
また、本居翁は、この會見の時、かねて、古事記の註釋をも、のせむの  
志あるよし、語られしに、縣居大人は、かくぞ諭されける。  
われ、もごより、神の御典を説かむと思ふ心ざしあるを、そは、先  
づ、漢心を清くはなれて、古のまことの意をたづね得ずばある  
べからず。然るに、その古の意を得むには、古言を得たる上なら  
では、能はず。古言を得むことは、萬葉をよく明らむるにこそあ  
れ。さる故に、吾は、まづ、専ら、萬葉を明らめむとするほどに、す  
でに、年老いて、のこりの齡、今いくばくもあらざれば、神の御典を  
説くまでに至ることを得ざるを、汝は、年さかりにて、行さき長



畫ひらごなく、いそしまれしあまり、師しのいましめを受けしことも、多おほかり。鈴すずの屋集やじふに、縣居あがたの大人おとなの御前みまへにのみ申まうせる詞ことばにて、

さきざき、萬葉集まんやふじふに、いぶかしきくさくさ、かきつらねて、つぎつきに、ごひあきらめ、又また宣長のりなががつたなき心こころにおふけなく思おもひえたる事ことどもをも、かつがつ、かきまじへて、よきあしきことわり給たまへごこひ申まうせる、をちをちの中に、いごよこさまに、あひたるごごごも、これかれ、まじれり。今いまより後のち、かくさまの事ことは、つつしみてよご、ふかくいさめ給たまふ、みごをかがふりて、いごもいごも、かしこみ、はち思おもふが中なかに、かの集じふの巻まきのつぎつき、かりこものみだれてあるを、淺茅原あさちばらつばらに、わきたため正ただし給たまへる、うしの御心みこころにたがひて、これはた、おのがおもほしきまにまに、ごごさまにしも論あひらひさだめて、こころみに、見みせ奉たてまつりし事ことは

しも、いま思おもへば、いごのやなく、かしこきわざになもありける。かれ、今いまのみの詞ことばをささげて、かしこまりまをす事ことを、たひらく、きこしめさへ。又またうたがはしき事ことは、猶なほはらぬちに、つみたくはひおきて、ひらく時ときをし待まつべきものぞご、をしへ給たまへる、まごごに、然さはあれども、あか、うたがひつつのみあらむに、おろかなる心こころは、いつかもはるく時ときあらまし。然さるに、今いま大人おとなのみさかりに、上かみつ代の道みちをこなへます世よに、生うまれあひて、雲くもばなれそきをる身みは、御みむしろのはしつ方かたにも、えさもらはぬものから、その人ひとかすには、かすまへられ奉たてまつりて、心こころばかりは、朝あさよひさらす、御許みもとにゆきかひつつ、百重山ももへやまかさなる道の長手ながてはあれど、玉たまづさのたよりにつけては、思おもひ申まうす事ことどもを、いささかも、かくさふごごなく、菅すがの根ねのねもごごに教おしへ給たまひ、さごし給たまへば、あぬ



ばしきいにしへの事は、ますみの鏡に、むかへらむごころに、た  
 まちはふ神の御世までの、こるくまなくなもありける。かかる  
 さきはひをしも、えてしあれば、おろかなる心に、つもるうたが  
 ひは、おのづから、ひらけむよを待つべきに、しあらずと思へば、  
 かつがつも思ひよれるすぢは、さらに、心に、残すごころなく、おも  
 ほしきまにまに、まをしこころみ、あげつらふになも。そが中に  
 は、あひたるも、ひがめるも、多かるべけれど、もごより、すみぞめ  
 のくらき心には、それはた、えしもわきまへあらねば、よきも、あ  
 しきも、ただ、明らけきうしのごころを、待ちてこそ、ひたぶ  
 るに、うちたのみてなも。かれ、今ゆくさきも、なほ、さるふしのあ  
 らむには、あかおもほしなだらめて、罪おかしあやまてらむを  
 も、神直日大なほびに、見直し聞き直し給へご、かしこみ、かしこ

みも、まをす。

ごある、これ、その時の怠状ごも見えたり。又、明和四年の頃なりご  
 か、翁は、草庵集玉箒といふをもつて、縣居大人の許に、批評を請  
 はれけるに、大人は、その消息のみを見て、その稿をば見ず、やがて、  
 かへされたり。さて、曰く、汝は、終に、事なすべき人にこそ、末たの  
 もしく思ひしに、草庵集のつれの奴となりて、あたたら、暇をつひや  
 せるこそ、いふかひなけれ。かかるつたなき物にかかづらふ心に  
 ては、學びの大業なりなむごころ、おぼつかなしご、叱りやられしか  
 ば、翁も、いたく、耻ぢかしこみて、わびられたりごなむ。然り、草庵は、  
 足利時代の歌人にして、時の四天王ごきこえたる一人なり。その  
 歌は、よろしからむ。されご、そは、註釋すべきほごの價值もあらざ  
 らむ。前途、よろしく、大成を期すべきに、かかる小徑にわけ迷はば、



まことの大道は、明らかがたからむ。大人は、翁の行末をおもひやりて、その志をはげましたり。これ、その稿を見でかへされたるゆるよしなり。

さて、本居翁の、縣居大人にあはれしは、この松坂の里にひこ夜やごられしをり、一度のみなりき。その後は、あはれ、弟子となり、師となれる、ただ、物問ひ明らかめられたるのみ。あはれ、弟子となり、師となれる、ただ、一度の會見にすぎず。さるを、かくまで、師弟の情のあつき、たれか驚かざるものあらむ。その間の消息、また、玉勝間の一節を見ても知られなむ。

そのたびたび賜へりし、御こたへのふみごも、いと多くつもりにたりしを、一つも散らさで、いつきもたりけるを、せちに、人のこひもごむるままに、ひこつふたつ、ごらせけるほどに、今は、殘

り少くなむなりぬる。さて、古事記の註釋をものせむ心ざし深きことを申ししにより、その上巻をば、考へたまへる古言をもて、假名書にし給へるをも、かし給ひ、また、中巻、下巻は、かたはらの訓を改め、所書入なごをも、てづからし給へる本をも、かし給へりき。古事記傳に、師の説にて引きたるは、多く、その本にある事ごもなり。

なごあり。翁は、縣居大人を慕ひに慕ひて、その弟子となり。さて、よく弟子たる禮を守られたり。縣居大人は、一見、翁を愛して、その師となり、さて、よく、師たる務をつくされたり。この兩大人の師弟の契を結ばれしは、わが國文學上の一大光彩にして、誠に、千古の盛事、天下後世、たれか、その餘光を仰がざらむ。この師にしてこの弟子あり。この弟子にして、この師ありごも、たたへつべからむ。



これよりさき、寶曆十二年一月、翁三十三歳にして、伊勢國安濃津の人、草深玄弘の女、たみ子を迎へて、妻とせられぬ。その年四月、母君勝子は、信濃の善光寺に詣でて、厄となられしが、明和五年一月六十四歳にて、みまかられぬ。ただし、去年の十二月、頃より、病にかかられしなりとぞ。つづいて、翌年十月、師縣居大人、七十三歳にて、みまかられぬ。その時の志ぬび歌にいはいはく、

神風の、いせの海に、よるなみの、ここしへに、

かくしもがご、はろばろに、をろがみて、わが

頼み、仕へ奉りし、加茂の大人、その大人はや、

こえて、天明元年十一月、師大人の十三回追慕の祭りに、翁は、歌會を催されたり。その時、翁の手向けられし、誦詞及び歌は、

わが學びのおやこましし縣居大人はも、この高き尊き古學の

わざをし始め給ひ、おこし給ひて、天の下に、よろづ代にほごこし給ひ、のこし給ふ、廣き長き御いさをはしも、ただへまつり、ほめまつらむによそへて、いはましものもなし。また、わがかがおりつる御をしへのあつき御蔭も、こひまつり、偲びまつるに、かけて、なぞへむものもなし。おほろかなるころこそばは、いはむすべも、たえて知りえず。かけむたごきも、おもほえず。いかにまにいひて、かも、ただへまつらむ。いかにまにかけて、かも、こひまつらむ。何によそへて、かも、ほめまつらむ。何になぞへて、かも、志ぬびまつらむ。

眞鴨は、かものうしは、玉ならば、あはびゑら玉、うま人の、うなける玉の、眞白玉、あやに尊み、久方の、天みるごこく、仰ぎ見し、その白玉の、ひかりはや、けにしひかりはや、あら玉の、月がき



ふねば、今日(けふ)はも、その月日(つきひ)を、あら玉(たま)の年(とし)も今年(ことし)は、小車(こぐるま)の、めぐり來(き)經(へ)ゆき、その年(とし)に、かへり來(き)得(え)ゆき、あやにあやに、たふごくありける、白玉(しらたま)の光(ひかり)はや、けにしその光(ひかり)はや、翁(おきな)の、縣居(あがたか)大人(おとな)を、あたはれしこと、かくの如(ごと)し。さて、大人(おとな)存生(ぞんじやう)の間(あひだ)は、前(まへ)にもあるし、如(ごと)く、絶(た)えず、文(ふみ)もて、なにくれご、不審(ふしん)のかずかず、問(と)ひただし、また、おのが思(おも)ひえたる事(こと)ごも、書(か)きまじへて、その善(よ)き悪(わる)きを、こごわり給(たま)へご、乞(こ)はれし中(なか)には、翁(おきな)その熱心(ねつしん)のあまり、時(とき)ごしては、却(か)りて、その考(かんが)ひ、よこさまにわたれることごも、なきにしもあらず。若(わか)かるをりには、大人(おとな)は、今(いま)より後(のち)、かくさまの事(こと)は、謹(つし)みてよなご、いさめられしことごもありけり。大人(おとな)、みまかられて後(のち)、翁(おきな)は、いよいよ、ますます、その道(みち)にいそしまれたりしかば、遂(つひ)には、道(みち)の濫輿(なんいう)を、きはめ、前代(ぜんだい)未發(みはつ)師(し)の未(いま)だ説(ご)き得(え)ざりし事(こと)

をも説(ご)き明(あ)らめ、ごこしへに、この學(がく)の泰斗(たいと)ご仰(おほ)がるるに至(いた)れり。古事記傳(こじきでん)の著述(ちやくじゆつ)の如(ごと)き、すなはち、これなり。そもそも、縣居(あがたか)大人(おとな)は、古學(こがく)の道(みち)を、ひらかれし始祖(しそ)なれば、そのいさをしや、大(だい)なり。されご、大人(おとな)は、さきのさごしごに、いはれしが如(ごと)く、よのかぎり、専(もつ)ら、力(ちから)を、萬葉集(まんやふしふ)にのみ盡(つく)されしかば、古事記書(こじきしよ)紀(き)に至(いた)りては、その考究(かうきゆ)未(いま)だ、あまねからず、廣(ひろ)く、悉(ことごと)く、ゆきわたらぬ、事(こと)ごも、多(おほ)かり。ゆゑに、道(みち)を説(ご)くことごも、おのづから精(せい)なることご能(あた)はず。また、未(いま)だ、確(かく)たる定説(ていごつ)も、あらざりき。ただ、折(ま)りにふれて、いささかつつ、そのはしはしを、示(しめ)したるのみ。本居翁(もとゐおきな)に至(いた)りて、はじめ、古學(こがく)の考究(かうきゆ)相積(あひつ)み、道(みち)ごこに、明(あ)かりさいふべし。古事記傳(こじきでん)は、實(じつ)に、翁(おきな)一生(いせい)の心血(しんけつ)を、これにそそがれたるものにて、その稿(かう)を起(おこ)しは、明和元年(めいわげん)にして、翁(おきな)三十五歳(さんじゆうごさい)、その稿(かう)を終(お)へられしは、寛政十



年六十九歳のをりなり。その間、三十五年、一日の如く、倦まず、たゆまず、その未曾有の學力をこらして、これを成就したる一大著述なり。されば、この著のよのつねの著にあらざるは、いふも更なり、この著ありて、世の人、はじめ、神代のむかしを伺ひ、古道を學ぶには、この古事記といふ書の宇宙にたくひなく、たふさく、ありがたきことを知るに至れり。浪越巖の回顧教法論には、つぎの如くただへたり。

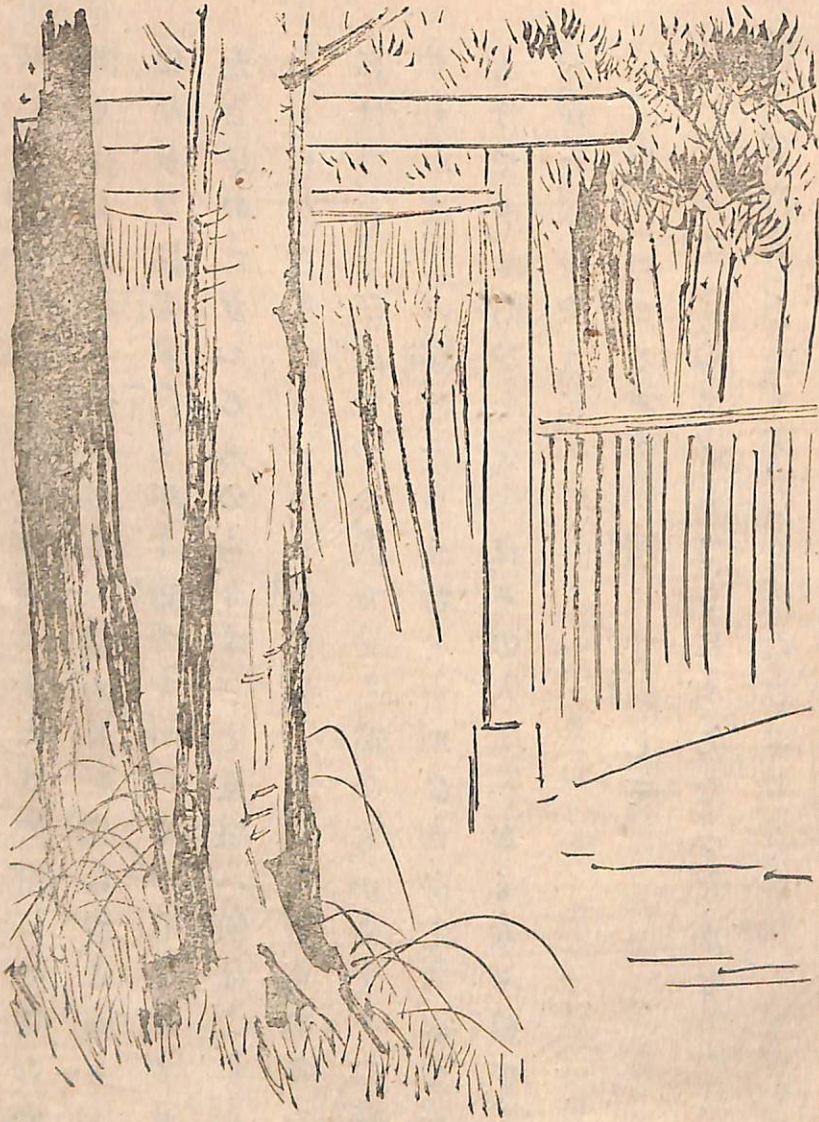
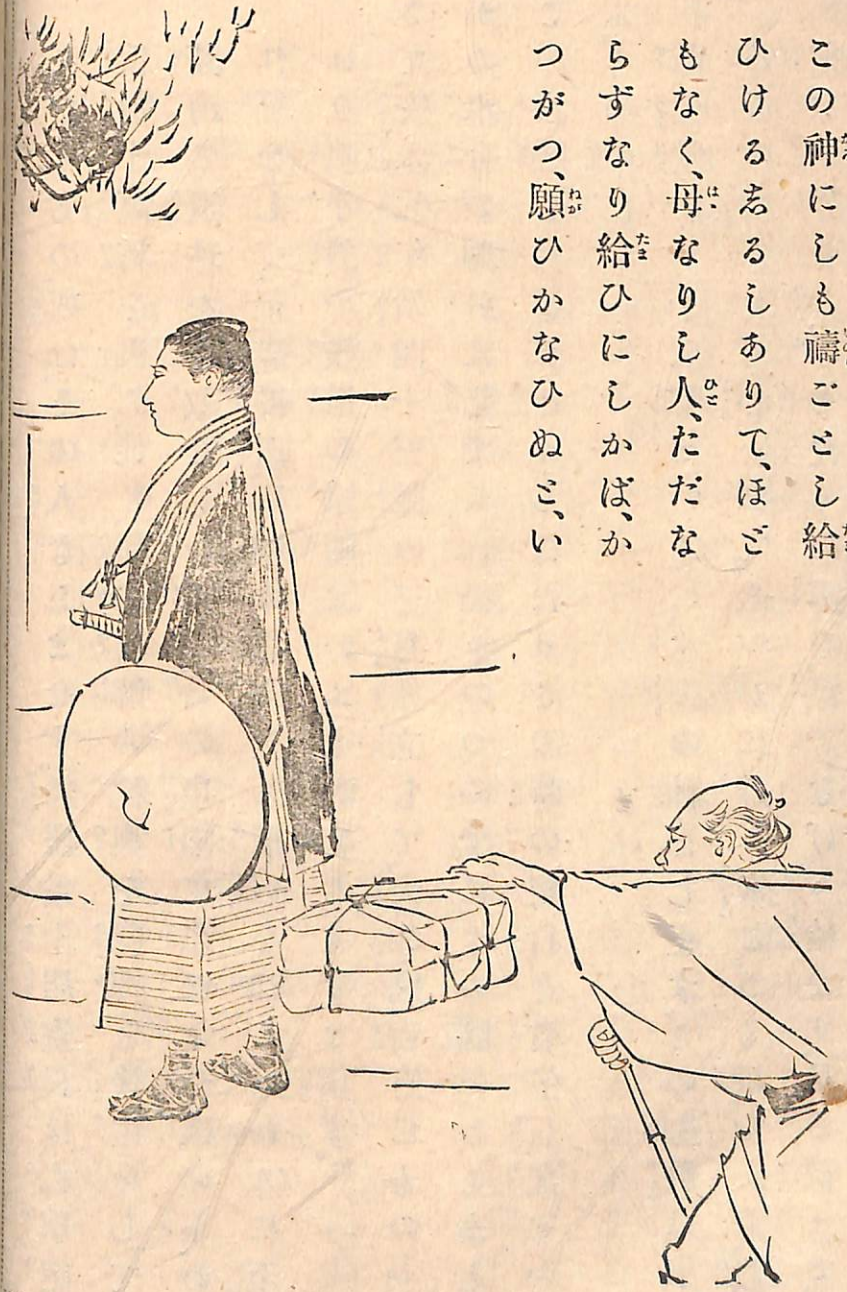
古事記は、確實、信をおくに足るものなるも、わづかに、數卷に過ぎず。何を以てか、神世の傳史として、詳細を了知し、憚然たることを得む。それ然り、然りといへども、慧眼炬の如き識者にありては、文外に意をさぐり、遂に、その妙奥をきはめ、照照乎として、神世の古にさかのぼり、皇祖皇靈の稜威をして、蒼生に光被せ

しむるもの、或は、その人なしとせず。鈴屋翁本居宣長は、古事記傳數十萬言を書し、能く、難知難解の秘奥を發揮し、後生をして、蒼海の遺珠を拾取せしむ。嗚呼、翁の皇國に忠なる、千歳の下、われ等をして、正襟悅服、皇國の皇國たる所以を知らしむるに至れり。嗚呼、翁や、該道の宗祖といふも、誣妄ならずと信ず。さて、安永元年、翁四十三歳の三月、旅立して、大和國吉野にもものし、かの水分の神社に詣でられぬ。そのついでに、この國の、ここかしこの古跡をたづねめぐられたり。この時の紀行を、菅笠日記といふ。その中に、

藏王堂より十八町といふに、水分の神まします。この御社は、よろづの所よりも心いれて、あづかに拜み奉る。さるは、むかし、我父なりける人、子もたらぬ事を、深くなげき給ひて、はるはるこ



この神かみにしも禱いのりごごし給たま  
ひけるあるしありて、ほご  
もなく、母はなりし人ひと、ただな  
らずなり給たまひにしかば、か  
つがつ、願ねがひかなひぬこ、い





みじう悦びて、同じくは、をの子えさせ給へこなむ、いよいよ、深くねんじ奉り給ひける。我は、かくて生れつる身ぞかし。十三になりなば、必ず、自ら率て詣でて、かへり申しはせさせむご、のたまひわたりつるものを、今すこし、え堪へ給はで、わが十一といふになむ、父は、うせさせ給ひぬるご、母なむ、ものついで毎には、のたまひ出でつつ、涙おとし給ひし。かくて、その年にもなりしかば、父の願はたさせむごて、かひがひしう、いでたたせて、もうでさせ給ひしを、今は、その人さへなくなり給ひしかば、かたがた、夢のやうに、

思ひいつるその神垣に手向して

ぬさよりさきにあるなみだかな

袖も、志ばりあへずなむ。かのたびは、むげに稚くて、まだ、何事も

覚えぬほごなりしを、やうやう、人ごなりて、物の心も辨へ知るにつけては、かの昔の物語をききて、神のみめぐみのおろかならざりしことを思へば、心にかけて、朝毎には、こなたにむきて拜みつつ、また、ここさらにも、詣でまほしく思ひわたりしことなれご、なにくれご、うちまぎれつつ、すこしに、三十年を経て、今年また四十三にて、かく、詣でつるも、ちぎり浅らず、年ごろのほい、かなひつる心ちして、いごうれしきにも、おちそふ涙は、ひとつなり。そも、花のたよりは、すこし、心浅きやうなれご、異事をついでならむよりは、さりごも、神もおほしゆるして、うけひき給ふらむご、なほ、たのもしくこそ。

なごあり。そも、翁の身にござりては、いごも尊きえにしある水分の神、いかでか、その身を守らせ給はざらむ。そのいにしへを志のび、



今をおもひ、父を老たひ、母をなつかしまれし、まごころを、神も必ずや、うけさせ給ひしならむ。その孝心の深き、敬神の厚き、おのづから、文字のうちにはあらはれて、讀む者をして、そぞろに、涙を催さしむ。この後、寛政十一年一月、七十歳にして、紀伊國若山に行かれし歸るさ、また、この社に詣でられしが、これ、この神に詣でられしを、はりなりこか。

天明二年、五十三歳の冬、家のうちに、高き屋をつくりて、その名を鈴の屋となづけられぬ。そは、三十六ある小鈴を、赤き長き緒にぬきたれて、柱などにかかけおかれたればなり。かくて、書讀みて、睡を催すたびごと、さなくも、ものむつかしき、をりをりには、それを引きならして、その音をきき、心ち、すがしくなるままに、また、銳心ふり起して、いそしまれたるよしなり。思へば、その鈴の功も、また、大なる

りといふべからむ。鈴の歌に、

床のべに、わがかけて、

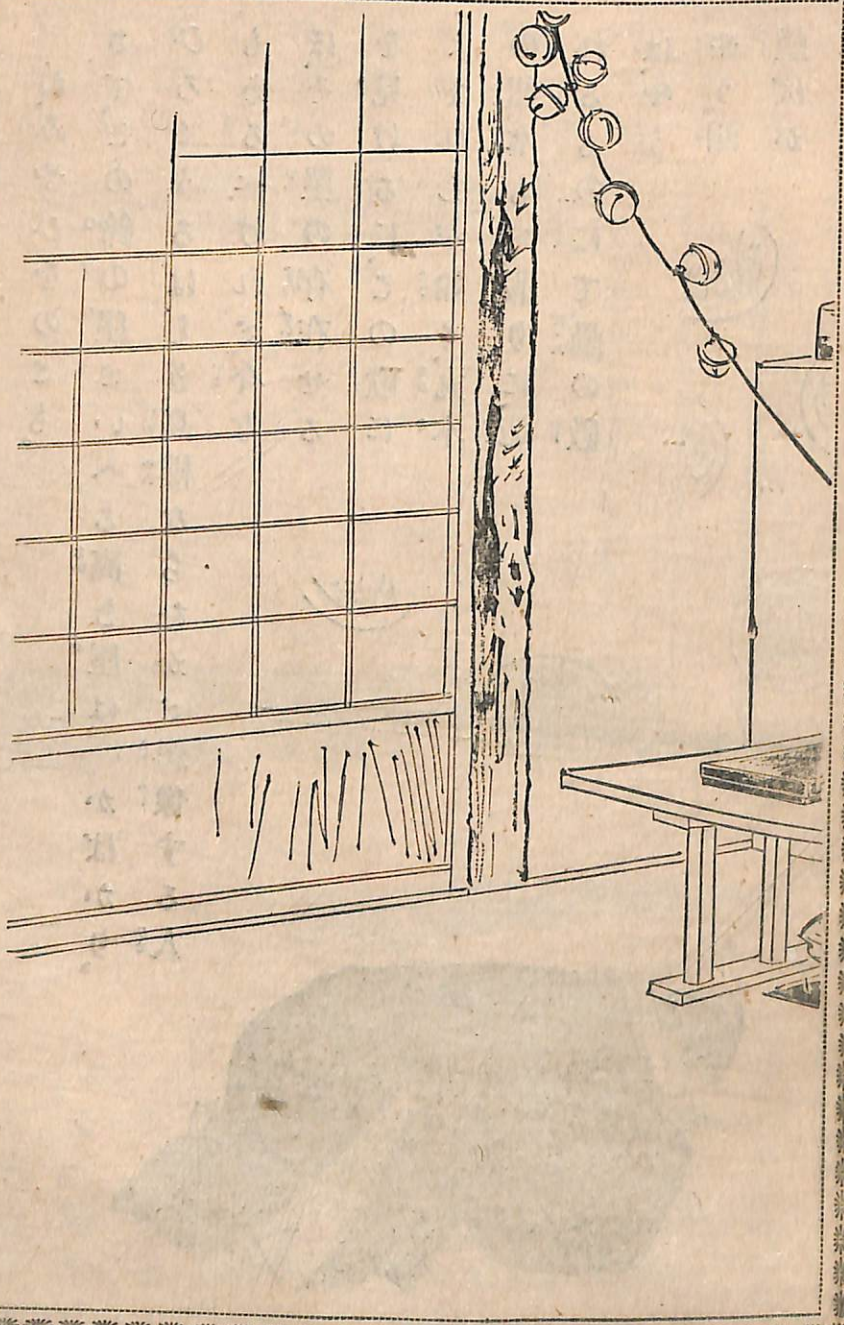
いにしへゑらぶ

鈴がねの、さやさや、

その翌年三月、友ごちうちつごへて、はじめて、この屋にて、歌のまごゑせられし時、翁のよまれたる歌、

少女らが、眞手にまきもつ、さく鈴の、五十鈴の、すずの、鈴の屋は、  
 志この志こ屋の、丸木屋の、小屋にはあれど、志なたてる、梯ふみ  
 ならし、のぼり立ち、ふりさけみれば、御城のべの、そのみづ山は、  
 みつえさし、志じに生ひたる、はしきやし、君まつの木も、うるは  
 しく、見かほし山ぞ、いさなごり、海のはまびに、よる浪の、いや志  
 く志くに、ごこしへに、來入り集ひて、まそかがみ、みしあきらめ

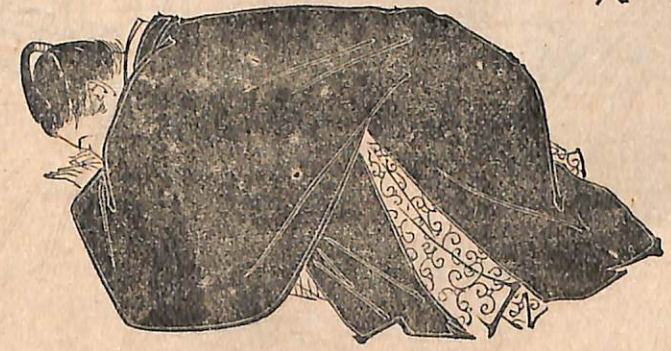
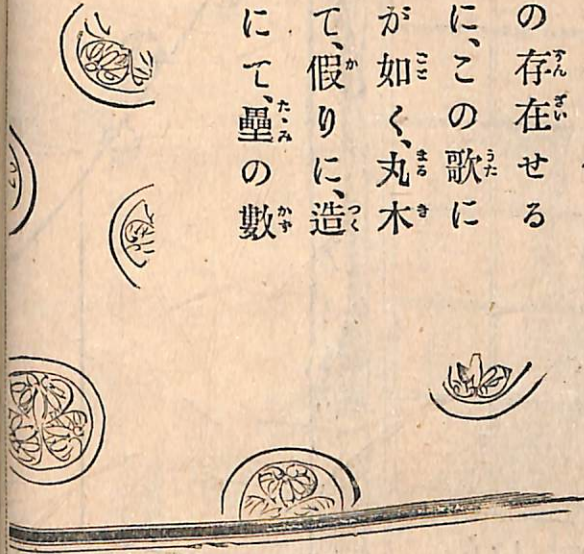






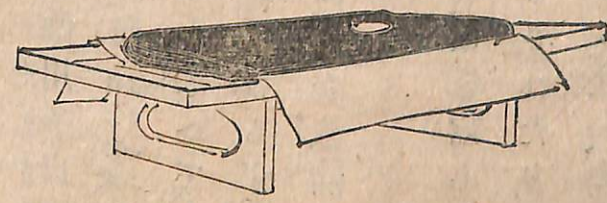
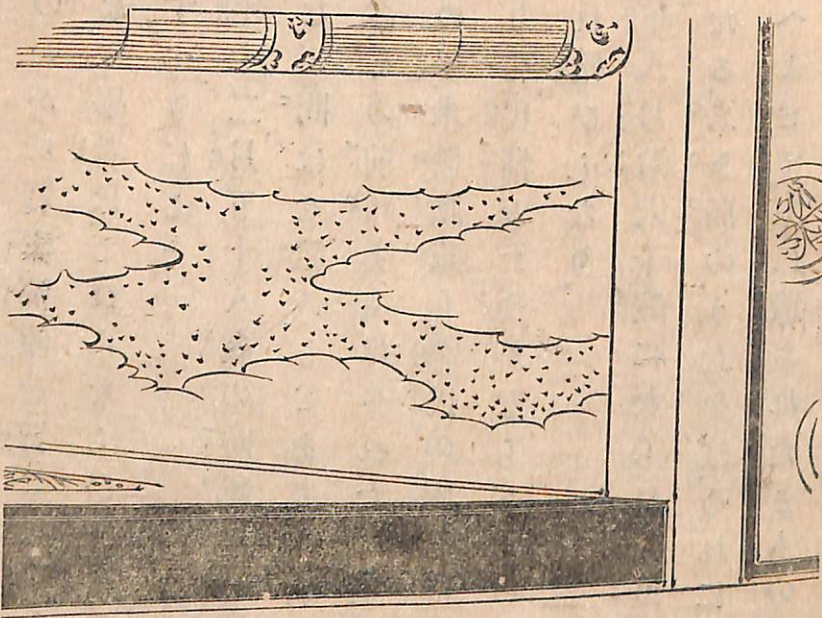
編八拾四第本讀年少

ね、みやびをのこも。  
 さて、この鈴の屋すずのやといへる高たかき屋やは、いかばかり、  
 ひろく、うるはしき高樓たかろうならむかご想像さうぞうする人ひと  
 もあるべけれご、今いまな  
 ほ、その屋やの存在そんざいせる  
 を見みけるに、この歌うたに  
 よまれしが如ごとく、丸木まるき  
 の粗木あらきもて、假かりりに、造つく  
 れるものにて、壘たみの敷かき  
 は、やう  
 やう、四よ  
 壘たみばか



長 宜 居 本

りも敷  
 かるへ  
 さかま  
 ここに  
 狭せまく、み  
 ぐるし  
 き、醜みにくの  
 小屋こやに  
 して、い  
 ま少し  
 は、廣ひろく  
 うるは



しくあら  
 ましをこ  
 思おもふばか  
 りなり。こ  
 は、全まったく、住すま  
 居家かやの、い  
 狭せまくて、事こと  
 の足たらぬ  
 ままに、つ  
 くり給たまへ  
 るものな



らむ。翁の、いかに質素節儉を旨とせられしかは、この一事にても  
あられなむ。學者は、これにならひて、自身の費を省き、専ら力を國  
家に盡すべきにこそ。  
天明七年十二月、五十八歳の時、紀伊中納言徳川治貞卿の、政治經  
濟の事など問はせ給ふことありて、翁は、玉匣世に秘本玉といふ書  
二卷及び、その前年あらはされたる玉匣をも添へて、上られたり。  
そは、この年、米價騰貴し、諸民の困窮、ひこかたならず、所所に、一揆  
など、起りて、民情、おだやかならざりければ、そが救濟の法を、翁に  
はかられ給ひしなり。  
寛政二年八月、翁六十歳になられし時、自ら、像を寫して、かの冒頭  
に掲げたる、志き島のうたをば、それにゑるされたり。こは、永久、子  
孫に傳へよとて、家に遺されたるものなるが、後に、をしへ子等の、

その像を得まほしきよし、切に、請ひければ、更に、宮脇有慶いふ  
畫師に寫させ、そを、その齡の數ほど、六十一枚かかせて、また自ら、  
かの歌をかかれたりこそ。有慶みまかりし後、尾張の畫師、吉川義  
信も、この像を寫せるが、翁の心になひたりと見えて、いたく、そ  
をめでられたりこなむ。  
寛政四年十二月、紀伊の殿大納言徳川治寶卿に召し出されて、俸  
五人扶持を賜はり、御勘定奉行支配を仰せつけられき。おなじく  
五年三月、教子の請によりて、京に上り、ふた月ばかり滞在のをり、  
初めて芝山宰相持豊卿に見えられて、

高くとも富士の芝山、  
あふぎも見ばやみねの志ら雪

ごよみて、奉られければ、



仰がれむものにもあらぬ我爲は

富士の芝山名さへはつかし

ご、御かへしあり。つづいて、妙法院宮眞仁親王にも召されて拜謁を賜はりぬ。そのかしこき仰せごごも蒙られけるをり、

伊勢のあまの思ひかけきや雪の海

てる日にちかき光見むごは

ごよみて、奉られけり。また、御酒御くだ物なご賜はりて、

手にうけて齡ものへむ御空より

くだる惠のつゆのくだもの

なごありしかば、宮にも、いたくめでさせ給ひ、その御庭の十二景の歌ごも、望ませ給へるを、その座よりみて、奉られけり。また、小澤

芦庵、伴蒿、蹊橋、本經、亮なご、名ある學者、歌人にあはれしは、このご

ろの事なりけり。

おなじく六年十二月、六十五歳の時、また、紀伊殿に召されて、大祓

を進講し、また、歌道の事を説ききこえられしに、殿のめでさせ給

ひしのみならず、また、聴衆の重役たち、いづれも感じあへり。さて、

城中にて、種種の物を賜はりしが、この時、殿の御座ご、翁の席ごは、

わづかに、二間ばかりを隔てたるのみ。辯舌、いご分明に、句切頼る

よろしかりければ、よくよく、老なれたるものご見えたり。さて、人

人、嘆美のあまり、その人品をさへ、ほめただへたり。なご、物にある

せり。また、そのみぎり、吹上の清信院殿にも、二回召されて、源氏物

語、若菜の巻、古今集、俳諧歌、及び、その眞名序を進講せられしに、殊

の外、御感に達し、また、物なご、賜はりぬ。この月、遂に登用せられて、

奥醫師の列に加はり、俸十人扶持を賜はり、また、御紋の服をさへ



下されけり。その用ゐるごころは、文學にあれど、翁の本業、醫なれば、かくは、はからはれたるなり。この時、翁のよまれたる歌、

我はもよ御衣たばりぬさき草の

三つ葉の葵の綾のみけしを

また、家にかへりて、そのよるこびの會せらるごて、

さきの海や廣きめぐみの浪かけて

磯のもくづも今ぞかひある

ごよまれたり。翁のよろこび、いかにぞや。

おなじく七年八月、石見國主、松平周防守、廉定朝臣、大神宮に詣でられけるついで、松坂の旅宿にて、翁を召されて、源氏物語の講釋を聽き給ひぬ。廉定朝臣は、いたく、この物語を好み給へるが、こを説き明らむるもの、當時、翁ならでは、他にその人なかりければ、い

よいよ、深く翁を慕ひ給ひて、なにくれご、こひ學ばれ、くさぐさの物なご賜はりけり。老かのみならず、督學小藤敏に命じて、翁の弟子させられ、老ば老ば、松坂に通はせて、旅居ながら、源氏の講説をきかじめ給へり。さて、みつからも、江戸に行かるるゆきにかへりに、必ず、松坂に宿りて、翁の教をうけ給ひきこか。いと篤學の君なりごやいはむ。

おなじく十年九月十三夜、かの古事記傳を、悉く、書きをへられける慶賀に、月見の宴を、例の鈴の屋に開かる。この夜、よひの程は、空すこし、うちくもりしが、更けゆくまに、すみ渡りて、月いと清かり。かたみに、歌よみかはして、樂まれたる、いかに、おもしろき賀會なりけむ。

おなじく十二年七月、七十一歳、自ら、死後の葬式、および、祭祀の事



ごもを、くはしく記したる遺言書をものせらる。また、その冬、伊勢國飯高郡山室山の山上に、自ら墓所を定めて、碑石を建て、そのかたはらに、一本の櫻を植ゑられたり。さて、その時、

山室にちごせの春の宿志めて

風にあられぬ花をこそ見め

今よりは果なき身さは歎かじよ

ちよの住處を求め得つれば

さいふ二首の歌をよみおかれぬ。おのれら曾て、もの學びのため、伊勢にありしが、月に一たびは、必ず翁の御墓詣にきて、この山のぼるを例ごせり。されば、その山のありさまも、その山のながめも、よく知れり。實に、風景絶佳の地にして、春は花秋は紅葉、そのけしき、えもいはず。うべなるかな、翁のかねて、そを見おきて、墓所ご

定められたるごごよ。

その十一月、また、紀伊殿より召され、高弟大平をつれて、和歌山に行かれぬ。さて、この時は、殿の御好により、源氏帚木の巻を講ぜられぬ。明くれば、享和元年、翁七十二の齡を、その旅宿にて迎へられ殿の前にて、年のはじめの壽言まをされぬ。その十三日、古語拾遺の進講ありしが、殿をはじめ、いづれも、麻上下にて聽かれたり。二月、奥詰の列に加へらる。その御用の節は、御廣敷へも罷り出づべき旨、申し渡されけり。

おなじく享和元年三月、人人の請ふがままに、京に上り、四條烏丸の東に寓せられぬ。そのよし、四方より聞き傳へて、物學びする輩翁の許につごひあへり。さて、また、閑院の宮、妙法院の宮にも召されて、歌なご奉られぬ。その他、中山大納言、三條大納言、園大納言、花



山院右大將、日野一位、大炊御門中納言、綾小路中納言、芝山中納言、富小路三位等の諸卿、或はその殿内に召し、或は翁の旅寓にたづねられて、延喜式、萬葉集等の講説を聴問し給へり。そのをりの盛なりしことは、實にいふべからざるものにて、くはしきことは、その時、隨從の弟子、石塚龍磨の都日記にあり。左に、その一斑を示さむ。

二十九日、雨ふる。午時ばかり、師の君、中山殿へ、はじめて、参り給ひぬ。師、まつ、大納言殿の御前にめされ給ひぬ。次に、おのれらも、同じさまなり。かくて、延喜式の八卷を説き申し給ふ。五ひらばかり、よみ給ひぬ。この日、またがひ参りける。人人は、俊信、有信、廣治、おのれなり。この講説きかせ給ふ御かたがたは、まつ、北づらに、御主の大納言、御子の宰相中将殿、南づらに、花山院右大將殿、園大納言殿、東園侍從殿など、立烏帽子に御狩衣なり。みやびた

る御さまにて、文机によらせ給ひて、きかせ給ふ。いご尊し。師は、この御かたがたの御座の末につづきて、上さまにむかひて、申し給ふ。あきみを隔てて、次に、晁演大徳、こなたかなたの殿人なごもさぶらひて、聴き給ふ。さて、師の君の、よみて奉り給へる、ほごさぎす片山蔭の志のびねを

たかき梢にけふぞもらせる

はじめて、この殿の御前に召されて、講説し給ふ心ばへを、かくは、ものし給へるなるべし。申の時ばかりに、まかでかへり給へり。

いかに、その講筵の嚴かなりしか翁の赤心、今や、世の人の仰ぐところとなり、皇國の道の、いや榮えに榮えゆかむ事の嬉しさよ。さて、その時、京にて名を得たる學者歌人に、あはれしはさらなり翁





をあたいて、のぼり來れ  
 るは、山城攝津伊勢尾張、  
 遠江甲斐武藏下野陸奥、  
 越後近江若狹飛彈伊豫、  
 土佐備前備中肥後出雲、  
 伯耆肥前淡路紀伊豊前、  
 豊後石見常陸阿波因幡、  
 すべて三十か國の人人  
 なりき。その六月、都を立  
 たれむとする時、こたび、  
 なにくれこ教を受け給  
 へる。高き御かたがた御



暇乞いとこひにこて、自らみづか翁おきなの寓居ぐうきよに來きまししもあり。或あるひは、御使おんつかひもて、めでたく、うるはしき物ものなご、馬うまのはなむけにこて、くさぐさ、賜たまはりしなご、まここに、ためし稀まれなる盛事せいじにて、翁おきなも、いと、うちよろこびて歸かへられたりこなむ。

その年の九月十三夜、松坂新座町なる大平氏の別莊べつそうみかへの屋やにて、人人ひとびとさうちつごひて、月つきをながめ、歌うたをよまれしが、その十八日にちより、はかなき心こころちに煩わづらはれ、やうやく、あつくなり給たまひて、二十九日にち、家いへにて、身みまかられぬ。年七十二翁おきなは、齡としの末すえまで、いごすこやかに、おはして、うち見みたるすがたも、若わかく、清きよげにして、物ものかく手てつき、書なまよむ聲こゑつかひまで、つゆ、老おいい衰おとろへられしけしきも見みえず。ただ、耳みみのみ、少すこしく遠とほくなられしも、却かへりて、齡とし長ながかるべきあるしなむと、皆みな人ひと、思おもひわたりけむを、わづか、十日かばかりの煩わづらひにて、は

かなくなられしこそ、口くちをしけれ。家の人人ひとびとはいふも更さらなり。その門人等もんじんらの悲かなみ、はた、いかばかりなりけむ。

かくて、十月二日、遺言ゆいごんのままに、かねて定めおかれつる山室山やまむろやまの墓所はかばかに葬はなむりぬ。碑いしに、本居宣長之奥墓もとゑのおくはかと銘めいせり。その文字もんじは、翁おきなの自ら、書かき置おかれしものなりとぞ。また、翁おきなの常つねに手てならされし笏しやくの形かたちを、櫻木さくらぎにて造つくり、それに、秋津彦美豆櫻根大人あきつひこみづさくらねおとなといふ諡あくりなを書かきつけ、それを靈牌れいはいとして、家いへに祀まつられたり。門人もんじんの中うちにて、尾張おわりの植松うゑまつ有信氏ありのぶしは、師しに仕つかふる志こころ、いと厚あつき人ひとにて、葬はなむりの日ひより八日やちがほご、その墓はかもりをつごめたりき。その時ときの事ことも、くはしく、山室日記やまむろにちといふに、あるしあり。

翁おきなには、二男になん三女さんむすめあり。長男ちやうなんは、春庭君はるにん、次男つぎなんは、春村君はるむらなり。長女ちやうむすめを飛ひ彈子たご、二女ふたむすめを美濃子みのこ、三女さんむすめを能登子ののこといへり。春庭君はるにんは、語學ごがくにくは

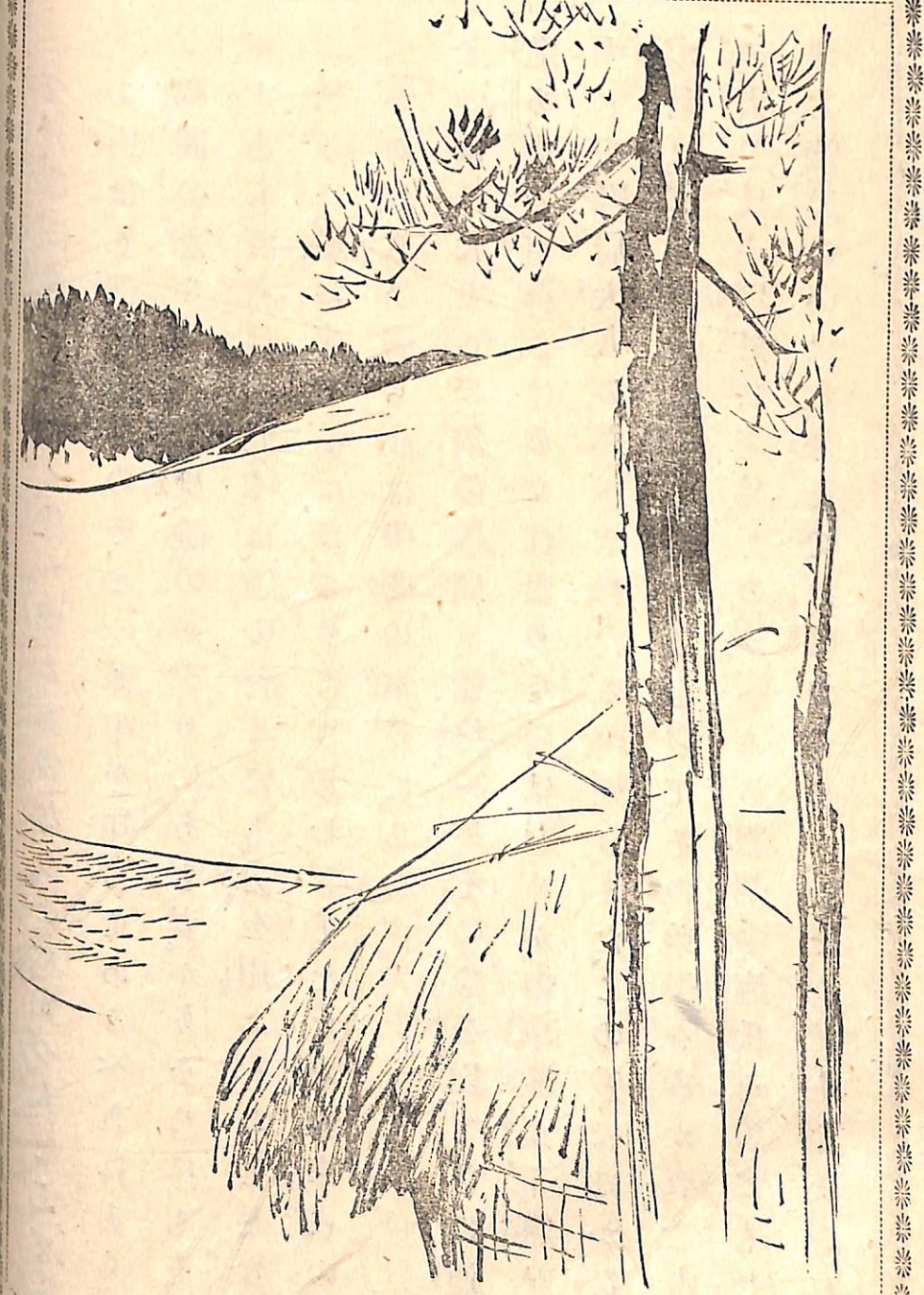


しく、詠歌に長じ、殊に、活語の事を啓發して、翁の未だいひえざりしことをのへて、後學を益せり。春村君は、小西氏をつぎ、美濃子君は、小津某に嫁せり。ごもに和歌に名あり。さて、嗣子なる春庭君は、中年におよびて、眼を失はれしかば、更に、高弟大平君を養子として、その跡を嗣がしめぬ。君、また、學びの道にいたりふかく、その弟子となりて、教をうけしもの、千餘人に及べり。翁の弟子中より、かかる人を見出されしその識見は、さることにて、大平君の能く翁の志をつがれしは、また、世にありがたき事ごもならむ。さて、翁の國文學のために心を碎きて、をしへおかれたる有益の事ごも多き中に、初山蹈に、

すべて、學問は、はじめより、その志を高く大きに立てて、その奥を究め盡さずば、やまじと堅く思ひまうくべし。この志よわく

ては、學問進みがたく、倦み怠るものなり。また、先づ、人にして、人の道は、如何なるものぞ、こいふ事を知らであるべきにあらず。學問の志なきものは、論のかぎりにあらず。かりそめにも、その志あらむ者は、同じくは、道のためにも、力を用ふべきことなり。然るに、道の事をば、なほざりにさしおきて、ただ、末の事にのみ、かかづらひ居らむは、學問の本意にあらず。こいはれたり。實に、翁の學問は、始終一貫、その志を以て、その道を進め、その本をきはめられたり。そのはじめ、かの草庵集玉箒を見ずして、縣居大人の返へされたるが如き、また、この意にほかならず。翁は、堅く、師の諭言を守り、こを以て、その弟子を導かれたり。かの大平氏の別莊にて、見月のかへるさ、服部中庸氏、そのごもせられし時、氏のいはく、今までは、殿のつこめ、いそがはしきままに、怠





りて侍れど、  
 この秋より、  
 暇ある身こ  
 なりぬれば、  
 歌よみ、文か  
 く學びにい  
 そしみ侍ら  
 むと申しけ  
 るを、翁は聞  
 かれて、さて  
 きて、教子ご  
 もに、その事



を好む人のみ多くて、むねと立てたる古學の道に志す人の少きは、なげきても、なげかはし。汝は、神世の學問にいそしみて、その道を明さむことをこそつとむべけれ。ゆめ、さるすちの事にのみな心をこめそ、いはれきごぞ。かれこれ、共に參考せば、その志の、いかに高大にして、學びの道の、いかに正しきかも知られなむ。また、玉勝間に、師の説になづまざる事とて、かくあり。

おのれ、古典を解くに、師の説と違へること多く、師の説のわろき事あるをば、辨へいふ事も多かるを、いごあるまじき事とおもふ人おほかめれど、これすなはち、わが師の心にて、常に教へられしは、後によき考の出で來たらむには、必ずしも、師の説に違ふとてな憚りそこなむ教へられし。こはいご尊き教にて、わが師の世にすぐれ給へる一つなり。大かた、古を考ふる事、さら

に、一人二人の力もて、悉く、あきらめ盡すべくもあらず。また、よき人の説ならむからに、多くの中には、誤りも、なごかなからむ。必ず、わろき事もまじらではえあらず。そのおのが心には、今は、古の心、こごこごく明かなり。これをおきては、あるべくもあらず。思ひ定めたる事も、思ひの外に、また、人のことなるよき考も、いで來るわざなり。數多の年を経るまに、先に、考のうへを、なほよく考へ窮むるからに、つぎつぎに、委しくなりもて行くわざなれば、師の説なりとて、必ず、なづみ守るべきにもあらず。善き悪きをいはず、ひたぶるに、古きを守るは、學問の道には、いひがひなきわざなり。また、おのが師などの悪き事をいひあらはすは、最も、かしくはあれど、それも、いはざれば、世の學者、その説に惑ひて、長く、よきを知るごきなし。師の説なりとて



て、わろきを知りながら、いはず、つつみかくして、よき様に繕ひをらむは、ただ、師をのみ尊みて、道をは思はざるなり。宣長は、道みちを尊たごみ、古いにしへを思おもひて、ひたふるに、道みちの明あきらかならむ事を思おもひ、古いにしへの意いの明あきらかならむ事を、むねご思おもふが故ゆゑに、わたくしに、師しを尊たごむことわりのかげむ事をば、えしも願かひみざる事あるを、なほ、わろしご誹そしらむ人は、謗そしりてよ。そは、せむかたなし。我われは、人ひとに誹そしられじ、よき人ひとにならむとて、道みちをまげ、古いにしへの意いをまげ、さてあるわざは、えせずなむ。これ、すなはち、わが師しの心こころなれば、かへりては、師しを尊たごむにもあるべきなり。  
あはれ、道みちをもごむる者ものの志こころざし、まここに、かくこそあるべけれ。悉こごとくく、書を信しんぜば、書しよなきに志こころかずご、いへりし如ごとく、悉こごとくく、師しを信しんぜば、師しなきに志こころかずごや、うつしいふべからむ。それ、道みちは天下てんかの道みちなり。

一人ひとりの私わたくしすべきものにあらず。教しよふる人も、おのれひこり立てるが如ごとくは、誇ほこるべからず。學まなぶ人も、師しの説せつなりとて、いかでか、それののみ、なづむべけれ。要ようするところは、ただ、道みちの道みちたるを明あきらむるにあり。師したり、弟子でしたり。これ、情誼じやうぎの上うへに於おいていふべきのみ。道みちのためには、志こころばらく、そを忘わすれざるべからず。これ、まここに、師したるべき者ものの、導みちびくべきところ、弟子でしたるべき者ものの、つごむべきころにして、翁おきなのをしへは、千載せんさい、動かすべからず。學まなぶ者もの、よろしく、これによりて、その道みちをきはむべくなむ。さて、また、伊勢國いせのくに白子しらこなる村むら田橋彦たはしひこといふ人ひと、曾かつて、そのをしへ子こならまほしとて、文通ぶんつうはしたる、その返事へんじに、

皇朝くわうてうの學問がくもんに於おけるは、秘事ひじ口傳くつでんなど申まをす事は、露つゆほごも無な之な候さう。左様さやうの義ぎを申立まをした候さうは、皆みな邪道じやどうにて候さう。多く道みちを説せき聞きせ候さうが、本ほん



意に候へば、門弟ならずして、野生に於ては、秘し申候儀、さらさら無御座候。さりながら、皇朝の古道、御執心の段、御殊勝の御儀、何よりも悦敷存候。

こいひ送られたりこそ。世の國學者流、ややもすれば、秘事口傳なごいひはやし、おのれひごり得たり顔にて、そを人に洩らさざるが、ありこれ、えせ學者の汚き卑しき下心にて、道のため、悪みても、またあまりあり。學問は、天下國家のため、なすべきわざなり。をしまず傳へて、清く明かに、ただ、ただ、その筋を違へざらむことを期して、教へ導くべきものにこそ、翁の胸襟、かくの如く、それ明かなり。また、何を以てか、同門他門の差別をば立つべき。頑迷、うつすべからざる、えせ學者、よろしく、鑑みるごころあるべきなり。さて、翁のものせし歌文、ごものは、まはめて、念し。ここに、その一斑を

示さむ。

### 短歌

さしいづるこの日の本の光より

こまもろこしも春やゑる覽

春の日にゐな野をゆけば有馬山

ありとも見えすたつ霞かな

通ひ來て我寢覺をや待ちつらむ

まくらに残る夜半の梅が香

吹くこなき風に靡きてくる春の

のどけさ見する青柳のいと

世にあれば今年の春の花も見つ



うれしきものは命なりけり  
見渡せば花よりほかの色もなし

櫻にうつむみよし野のやま

わけのこす末野の霞たちかへり

明日もきて見む春のゆふ暮

朝戸出の庭の芝生に昨日まで

知らぬすみれの花さきに晝

花ちりて人めたえにし山里に

ゆく春さへや留らざるらむ

五月山裾野の草をわけ行けは

空にも繁くなくほごごぎす

木の川にもゆる螢やいもせ山

隔つる中のおもひなるらむ

涼しさを包みて歸るよしもがな

袖師のうらのなつのよの月

吹く風もにはかにすゞし夕立の

空にまよひて秋や來ぬらむ

名のみして秋の末野のはつ霜に

うらがれゆくか松虫のこゑ

山風ののきの松ふくさびしさは

わが身ひこつの秋のゆふ暮

たぐひこし嵐は松にやすらひて

軒ばすぎゆくさをあかの聲

なく聲も波に紛れてはるばるこ



ゆくかたゑらぬ浦千鳥かな

八重霞いづこの空をふるさごと

ながめもやらむ春のゆふ暮

關守のゑらぬうきねの夢路だに

ゑばしはゆるせすまの浦風

いたづらに年は六十になりけり

なすべき業は未いまだならずして

さすが又嬉しきふしもまじるよに

うき事ばかり數へられつつ

よそに飛ぶ螢を見てもなき人の

靈の行方やこひしかるらむ

今年こゝしとは知らで今年こゝしもめでぬらむ

# 長歌

## 吉野山のうた

ながきわかれのなが月の影

大汝すくなひこのの神代より、かくしわれやも、みよし野の、よし野の山は、うちな  
びく、春さりくれば、高ねには、霞たなびき、をちこちに、櫻花さく、あやにあやに、うら  
くはし山ぞ、よし野の山は、

## 櫻の花のうた

つつし花にはへるこらが、若草の、つま待ちかねて、小金門に、立田の山の、こちこち  
の、こぬれまみみに、さくら花、咲ける春べは、草まくら、旅ゆく我も、咲く花の、色なつ  
かしみ、天雲の、いゆきかへらひ、過ぎがてに、木のもとごと、に、駒とめて、つらつら見  
つつ、玉ぼこの、道のゆくさに、とほけども、そこは、わすれて、たまのを、の、長き春日を



くらしつるかも。

よし野川に花ちりて流る

みよし野の山のさくらは、たきの川瀬に、ちりてながるも、高根にし、あらし吹くらし、川かみに、あらし吹くらし、みよし野の山のさくらは、瀧の川せに、ちりてながるも。

さこしうた

秋津しまやまどの國は、神ながら、さかしらせぬ國、まひことせぬ國、ことあげせぬ國、さひづるや、もろこしの、から國は、まこのまこ國、まこわざを、まなめかくすと、物かざり、事いつはりて、いふこと、こちたき國、するわざの、まひたる國を、いかさまに、思ひまどへか、おむかしみすも、うつせみのよ人、もろこしの、まこのまここと、ゆめよゆめよ、なまどはひそね、うつせみのよ人、

思ふことをよめるうた

おもふこと、いはすやまめや、もろこしの、からのころの、よの人は、きかすともよし、今こそは、きかすありなめ、大直日神しいませば、真心に、またもかへりて、真直にし、きく世は、あらむを、思ふこと、心にこめて、いはすやまめや、

ふじの山のかたに

あやにあやに、たかくたふとく、くすはしき、山はふじのね、うつし世の神とも神と、たたなつく、よものむら山、高山を、小田のつむれど、あしもとの、ふもとになして、かしのみの、ひとりぬけて、青雲の、たなびく空に、あまそそり、そそりたたせり、その山を、ただに、まさめに、ふりさけて、見し人こそは、まことしかたく、たふとくくすはしき、こととは、知るらめ、鳴神の、音のみききて、いまだ見ぬ、人は、かつかつ、月草の、うつし書きたる、このかたを、見ても、まぬばね、この山の、高くとく、くすはしきこと、



楠正成主のかたに

うまごりの、あやにくすしき、くすの木、うしの命の、あめつちに、いたれるいさを、  
一たびは、たちけるものを、うつせみの、よのまがごとく、二たびは、たたずてつひに、  
みなど川、うかぶみなわの、いたづらに、つかへまつるふ、もののふの、かがみとなり  
て、天地の、よりあひのきはみ、天地に、いたれるいさを、もち月の、てりたらはして、  
たちけるかも、

業平朝臣の像かきたるに(今様)

むかしをどこと、みはなりて、のこることばの、花はなほ、春やむかしの、春ならむと  
ばかり今も、にはふなり、

山家のこころをよめる(今様)

世のうきことは、のがれすむ柴の、あみ戸も、さすがまた、あらしの音の、身にきめて、

都こひしき、山のおく、

櫻花のうた(近体)

かげろふの、もゆる春日に、立ち出でて、ふりさけ見れば、足びきの、山の尾上は、きの  
ふけふ、雲も霞も、色そひて、にはふさくらの、花ざかり、知るも知らぬも、うちむれて、  
山分衣、はるばると、ひばりなく野の、はつわらび、をりをり通ふ、春風も、袖にえなら  
ぬ、花の香や、見過しがたき、道のべの、木のもごととに、たちよりて、なつさひゆけば、  
唐錦、こきませておる、青柳の、いと長き日も、すみ染の、ゆふべになりて、いとどしく、  
まさる花香を、あたらしみ、故郷人は、うらむとも、よし一夜はと、くさまくら、あかぬ  
木かげに、旅寝して、なほうば玉の、よもすがら、かすむ木の間の、月かげに、見るほと  
もなく、山寺の、かねのひびきも、ほのぼのと、花よりまらむ、山かつら、かかるながめ  
の、世にはまた、あらしと絶えし、高根より、さしものどけき、朝日かげ、うつろふ枝に、  
こづたひて、なく鶯の、羽風にも、ただ一ひらは、おのづから、ちりくる色も、まづかに  
て、見るにはあかぬ、花染の、衣の袖に、引よちて、をりかざしつ、つげふもなほ家路わ



すれて、梓弓、春の山べの、櫻がり、世のうき事も、このころは、まばしわすれて、あるものを、そも一とせに、二たびは、わひみぬ春と、思ふにも、あかぬは花の、さかりにて、ちらぬ日數を、ながかれと、まめ引きはへて、ちはやぶる、神にもいのり、人ごと、心に、心のかぎり、をしめども、とまらぬ色を、いかにせむ、この花ゆゑの、としごとの、心づくしを、かぞふれば、またまら雪の、ふるとしに、みまがふ木木の、梢より、その面影を、思ひそめ、日數つもれば、あらたまの、春立ちかへる、山のはに、心もかかる朝霞、かすみそむれば、谷川の、こほりのひまの、はつ花は、はつかにさけと、初草の、野べの雪間も、かた糸の、よるよるはなは、さえかへり、ただいたづらに、春の日も、あまた重なる、から衣、ひもやや長き、ささらぎや、吹き來る風も、寒からで、眞木の板戸の、朝戸出に、庭の一木を、ながむれば、花の下ひも、とききぬと、このもかのもに、咲きそめて、今はさかりも、ほそちかみ、吉野たつ田の、おくまでも、こころうかるる、八重がすみ、深くなりぬる、ゆふべより、雲井のかりの、玉づさも、かさくらしふる、春雨に、うつろふ色を、思ひねの、曉がたの、山おろし、吹くかどすれば、時のまに、なべての櫻、さくと見し、昨日の花も、春の夜の夢、

京の山田孟明が許より、ふみおこせたるかへりごころ  
 すごて、よみておくりける(近体)

かぞふれば、みやこ別れし、年もはや、十とてみつの、春がすみ、また立ちかへり、めぐり來て、うしの車の、わがとしも、よそに聞きこし、老らくの、尋ねくるまで、なるみがた、鹽くむあまの、なれ衣、なれしむかしの、友鶴も、雲ぬはるかに、へだたりて、磯邊の浪の、よるひると、いはす戀しき、その中に、山田の早苗、とり分けて、思ひいづみの、柚人の、たつきも知らず、おく深き、ふみの道芝、うちはらひ、さきにたちつつ、まるべせし、露のめぐみは、いまさらに、かけてもいはず、あらたまの、春は野山の、花のかけ、袖をつらねて、菅の根の、長き日くらし、秋の夜は、さやけき月に、いとどしき、光をそへて、まきしまや、やまともろこし、かすかすの、君がことばの、玉くしげ、あくるもまらず、まどぬせし、そのをりをりも、夢とのみ、なりにける世の、はかなさを、かたりあはせむ、人もなみ、谷の小川の、ひとつ橋、ひとつ心、かけてのみ、思ひわたるも、かひなきに、又しもゆきて、蓬坂の、關の杉むら、過しよの、事もかたらひ、このころの、みやこ



のさまも、ます鏡見むとはつねに、思へども、まづがつま木の、まばしだに、事しけ糸の、いとまなき、身をうら舟に、さすさをの、さすがわすれず、時時に、ふりはへてとふ、鈴鹿川、ふかきなさけの、水くきを、みるに、心は、きの國の、名草のはまの、もしは草、かきやるかたも、なみだのみ、うれしきせにも、まづなかれつつ、

文

月前納涼

みな月の廿日のほど、おほかたも、このころは、あつさ、どころせきは、なるを、まいて、朝よりちりばかりも、くもりなく、てりは、たたく日かげの、西日になるほど、よにたへがたくて、思ふとち、うちとけたる物語を、だにして、まぎらはさばやと思ひて、むつましく、わひかたらふ友だちのもの、しつ、なきほどに、やあらむと、おぼつかなく、思ひしも、まろく、けふは、ものへなむまかりぬるといふに、いとくちをしくて、かへりなむとするほど、このあるじかへり来て、まづ見るより、けふのあつさを、かへすかへす、いひつづけ、おせおしの、とひ、肩うちならしつ、つと、なひいさ、雨

おもてなるところ、いよすかけわたし、あたりあたり、いとさはらかに、まづらひたる、いとすずしげなるに、夕風、ままとるべきは、しのかたに、ついでなるに、かつ、かつ、あつさも忘るる心ちして、すのこの端に出でて、見いだせば、庭の梢ども、いづれとなく、まげりわひたるものから、木だちうとましからぬほど、につくるひなして、このもかの、もには、かなきまば垣、なつかしく、ゆひわたしなど、まめやかに、見どころあるさまなり、夕つけゆくほど、軒ちかき、吳竹の下風、心もどなきほどに、うちそよめきたるも、わかぬ心ちのみぞせらるる。ややありて、同じ心なる人、また、ふたりみたりなむ來あひたる。さうさうしかりつるに、いどうれしくて、はかなき物がたりも、いま一きは、心ゆくこちす。心へだてぬとちの、まどぬは、なべて、うちとけたるなむよきを、まして、かくあつきには、いかでか、かして、まよりもおきあへ侍らむむらいのつみは、ゆるされなむとて、ほどほど、帯なども、ときちらしぬべし。あるじ、なさけある人にて、庭のたて石など、に、水そそがせたる、夕立のなごり、覚えて、木木の下枝、うちなびきて、落るまづくも、いひまらさず、すすしく、見ゆ。やうやう、うちとくらくなり、ゆくに、ささやかなる、わらはの出で、来て、どもし、火ちかくとも、せば、いでや、け



ちかくて、いとあつかはし。こよひは、どうろにてをわりなむ、この火けちてよ、いふげにさも侍らむとて、立ちていぬるほどもなく、せんざいのまげみにたてるに、火いれたる。ほのかなる影に、青葉の露、さらさらと見えて、同じく吹く風も、ことに涼しくぞ覺ゆる。夏の月なきほども、庭のひかりなき、いとむつかしく、おぼつかなきものなるに、このひかりなからましかば、いと物のはえなからましをどて、皆人めであへるに、あるじのまたりがほなるも、ことわりなりかし。かくて、よひ過るほども、こだかき松に、ほのめく影は、月出でたるならむとて、東のつま戸おしひらきて、待つほども、とばかりありて、いとほなやかにさし出でたるは、又なるものなく、涼しくおもしろきには、どうろの光も、いまだむとくにけたれにたる。風さへいと冷やかに、うち吹きたるは、ふる川のべの杉の下蔭ならねども、秋やかへりてなご、うちすしののしる。大かた、月は秋をこそ、めでたき時に、古より、いひおきたなれど、このごろの空に、かくまち出でたるほども、たとしへなく、心もすみて、物むつかしさも、こよなく、まぎるるわざになむ。

依月客來

むかし、月日のゆくを、いみじくなげくおきなありけり。長月十三夜、月いとおもしろきを、よひより、ただひとりゐて見けり。やうやう、更けゆくに、わがよのほども、いとと思ひはかられて、風も身にしみて、いと物どころぼそくなり、にければ、

大かたは月をもめでしこれぞこの

つもれば人の老となるもの

とよみて、今入りなむと思へど、こよひしも、いたづらに、ねてあかさむも、さすがに、とかくやすらふほどもに、としごろ、心やすく語らふ友だちのありける、それも同じごと、つくづく、ひとりゐて、やどの月をなむ見ける。さうさうしくや思ひけむ、夜はいたく更けぬれど、ほを遠くもあらざりければ、この翁がり、ゆくりなく、とぶらひ來けり。夜ふけて、おもほえず來ければ、あるじ、心なぐさみてけり。さかづき出して、もろとも、にのみつつ、物語しつつ見る。あるじのおきな、ありつる歌を書きいでて、まらうとに見せけり。まらうと、この歌を見て、よみける。



かゞさしてなしとこたへて老らくの

來むにはあはで月をこそ見め

よしやさばれ、かくばかりをしき夜をと思ひてや、かくは、よめりけむ。されど、あるじの心には、なほ、あぢきなしとや思ひけむ、いかが思ひけむ。知らずなむ。この歌をも、かく人も、みる人も、ただひるのやうにて、燈のもとにもよらぬを、さかづきもて出でたるわらはのかたはらより、ねむるねむる、見をりて、ひとりごとにて、

風ふけばなびくすすきに鳴く虫の

こゑばかりこそよると見えけれ

となむ、よめりけるを聞きて、まらうとは、いみじくめでのしるを、あるじの翁、かしらうちふりて、いであなあやし、すすきのなびきよらむからに、聲の見ゆとは、よむべきものは、わらはごとにて、いたくすぐしたりと、いましむる大聲に、わらはの目も、大きになりて、ねふたさも、さめにけりとか。

山路の菊の物語

ある人、長月の九日に、けふは、高きにのぼる日とて、おくまりたる山里に、としごろ、すむ人の、久しく音もせぬとぶらぬがてら、まかりけり。やや深くいとところなりければ、道のはど、いたくこうじにたり。このもかのも、千種の花をも、みなうつろひて、あるかなきかになりぬる中に、花すすきのたかやかにて、ひとり残れるたもと、いと露けげに見わたさるるなほ、あはれ深き山路にもかかりけることと思ひつつ、入りもて行くままに、道のはどり近く流れたる谷川の、水の音すみて、いといさぎよきが、物にもにず、いみじくかうばしきに、あやしくなりて、あしもやすめがてら、まばし立ちやすらひ、思ひめぐらせば、これや、さは菊の雫のおちつもりて、流れくるならむと、桃の花ならねど、みなかみの尋ね見まほしくなりて、心ざしのところをばわすれて、この流れにつきてのぼるに、はかばかしく、道もなきそはづたひを、たどりゆけば、いとせしく、くるしくて、あしのうら動かす、わびしきを、わりなくねんじつつ、まひてものするままに、思ひしもゑるく、菊いとまげくある所にいたりぬ。いまを盛りと咲きみだれたる花の色香は、なほ奥ふかくと、あながちに分けいるはどに、ひまなくまげく散りかかる袖の露、うちはらふまにも、千とせをや



經ぬらむと、かつがつ、仙宮にもいたれる心ちさへぞえたりける。めもあやに、どころ  
 せくにはひわたれる。かたつかたを見れば、いはほのかたそばに、まりかけて、まへ  
 なる流れにめをすまして、酒のみをる人なむありける。いみじく年おいて、かしら  
 に黒きすぢなく、ひげいと長くなせ、すべて、いと神きひたる、いといとあやしく、音  
 にきく、やま人といふ物にこそと、かつはゆかしく、ありさまも、きかまほしければ、  
 ちかよりて、かく世ばなれて、物ふかき山中に、ひとり、かくても、のし給ふは、いか  
 なるゆゑにかと問へば、のせやかに見あげて、こはいつこより、いかなる人のおは  
 しつるぞ、おきなは、このいはほの中に、かくて、八千年の月日をなむ過しつるを、さ  
 らにさらに、よの人のとひくることもなきを、この菊の花さく秋ごとは、なほわ  
 くらはにとひ來る人もやと、たえず、心には待ちわたり侍ると、いとかうがうしき  
 聲して、かたりつつ、今日しも、かくたづねつることを、いとうれしと思へるけしき  
 にて、

世の中のうきをも知らでえらぎくの

はなさくあきを八千たひぞ經し

とて、もたるさかづきをさすに、ただ夢かどばかり、たどられて、いらへむことの  
 も覺えぬを、うち思ふままに、

たぐひなき君がよはひをさくの露

われも千とせのちぎりむすばむ

とて、のむ酒も、よのつねならむやは。

東路の旅

これかれともなひて、いせの國なにかしの里を、曉の空に立ち出て、鳥がなくわづ  
 まの旅におもむさける。ころは霜月の十日あまりの事になむありければ、旅衣の  
 袖ふく嵐も、いたく身にまみて、もの心ぼそきに、山の梢道のべの草葉も、冬がれわ  
 たれるけしき、いとあはれにながめやられ、海づらによせかへる浪さへ、我もいつ  
 かはどげにうらやましく覺えつつ、玉ざさの野べのかりねも、一よ二よどかさな  
 れば、故郷もやうやうはるかになるみの浦を過ぎて、みかはの國にもなりぬ。在原  
 の中將の、から衣のこののは、はるけき昔の跡たえぬ八橋も、ほを近しどきけと、



杜若の花のをりにもあらざれば、すさまじく思ひへだてて過ぎぬ、はや遠江の國なりといふをききて、ひとりがよめる、

ふるさとはどほつあふみとさくからに

ふじの高根やちかくなるらむ

たれもたれも、この東路は、まだはじめたる旅になむありければ、富士の山を見むことをなむ、いつしかと心にかけて、旅のものがなしさも、うちまざるやうなるに、このころの空、雪けにのみうちくもりつつ、いと心もとなくて、過ぎ行くほどに、さよの中山も、ひるのほどにこえすぎて、音にききこし大井河も、水いと浅く、袖つくばかり、心やすく渡りぬ、この川は、どほつあふみと、駿河の國のさかひに流れて、いと大きな川なりけり、けふは、さりととも、富士見えなむとおもふに、なほあやにくに晴れやらぬ空、いとふせくて、日もくれぬれば、宇津の山ちかき里にやどりぬ、つとめて、一人がいふやう、よべの夢に、故郷はさしおかれて、まづ見まくほしき、かの山をなむ見つるといへば、今一人がいひけらく、夢にふじを見るは、うへなき事となむいふなるを、なにかしらためには、

するがなるうつの山べのうつにも

夢にもふじは見えぬなりけり

となむよめりける。ゆきゆきて、清見が崎に、駒をとめて、三穂の松原うちながめやりつつ、まばしやすらふほどに、名にたつふじのねおるしにや、雪うちちりて、風いとはげしく吹き来るほど、今ぞやうやう晴れま見えそめて、はるけき雲の中空にあやしき物なむ、あらはれたる。ただ綿なをつみあげたらむやうして、ましろにいと高く見ゆ。人人あきれて、かれなにぞと、あふぎ見やりて、まばしは、それとも思ひわかず。やうやう、かたちの見えゆくにぞ、かの夢にも見ざりし山なりけりとは、知りにけるとぞ。

荒木田末偶寛政遷宮物語の序

天の下のもろ人の、あふぎたふとみまゐるで来る、神風のいせの宮の、五十鈴の宮の宮うつしは、天なるや棚機姫の手玉もゆらにおるはたの、廿年に一たびと、水垣の久しき御世よりさだまりて、天地と天つ日嗣と、とこしへにかはるべからぬのり



のまにまに、四方の海風浪ものをけくて、大舟の寛なる政の袋にいれしは弓の、はじめのとしの、大きみのいかしの御世を、長月の、いく日のたり日の、ひさかたの、月立の夜の、門守る犬の時を、吉時と、あらたまのとしふる宮より、にひ宮のみづ宮の、どりふける御かやのとしのひ、そそきなく、目かがやくこがねの御かざり、打ちかためて、ふとしきたてたる、まささく檜の御安らかに、朝廷の御つかひつかさづかさ、この大宮のつかさづかさ、もちゆまはり、もち清まはりて、つかへまつりまづめまつりし、この宮うつしのはじめをはりを、そつ彦眞うあらさだの末偶主の、いそしくも、書きまゐりたるこのふみよ、あし引の山の口の祭より、月かさね、年かさね、そのまつり、このまつり、ありとある神わざは、川のべにさらす手づくり、さらにもいはず、をりをりの、くさぐさのあだ事にいたるまで、そのとしごろの事らはし、大まわらこに物いれて、もるるなく、のこるなく、たびごとくに参りきて、見まつるがごと、見るがごと、まつぶさに、まつばらに、書きあらはしたり、まゐるしたり。あはれあはれ、天の下のもろびとに、見せまほしきは、この書なるかも。

述懐の詞

昨日は、けふのむかしにて、はかなくのみ、すぎにすぎゆく世の中を、つくづくと思へば、あはれ、わが世も、いくほぞや、手ををりてかぞふれば、はやみそちにもあまりにけり、命長くて、七八十いけらむにて、だに、はやく半は過ぎぬるよと思へば、まだよごまれるやうなる身も、ゆくさきはどなき心ちのして、心ばそくぞ覺ゆる。かくのみはかなく、こころなき木草鳥けだもの、同じつらに、なにすとしもなく、あかしくらしつつ、いけるかざりのよをつくして、いたづらに、昔の下にくちはてなむは、いとくちをしく、いふかひなかるべきことを思ふにも、よろづにいたりすくなく、つたなき身に、しあれば、何事をまいでか、はよの人にもかすまへられ、なからむ後の世に、くちせぬ名を、だにとどめましと、いと人にも似ぬおろかさへ、とりそへてぞ、悲しく、心うかりける。ざりとて、はた身をえうなき物に、はふらかしはつべきに、しもあらず、かくのみ、つたなくおろかなる心ながら、何わざにまれ、おこたりなく、わざと心に、いれて、つとめたらむに、つひには、ひとつゆゑづけて、なのおめ



にしいづるふしもなごかはなからむと、あいなだのみにかかりてなむ。

雪のあした友だちのもごにいひやる書

けさのけしき、めづらしくは御覽せずや。冬になるより、いつしかとのみ、日ごとに待ちわたり侍りしに、きのふのゆふべ、風いたく吹きあれ、雪のたたまひも、いみじくさえわたたりて、とぶ鳥のけしきまで、かならず、ふりぬべき空とは見給へしかと、いとかくまで深くとは、思ひ給へかけざりきかし。おけくれ、心へだてぬ友をちは、かからぬ折だに、何事につけても、まづ思ひ給へ出でらるるわざなるを、まして、かくめづらかなる朝ぼらけを、心なき身の、ひとりのみ見侍らむことの、いとわたらしく思ひ給ふれば、よし跡つけても、人のとひ給はましかば、こよなくをかしさもまさりぬべきものと、思ひ給ふるに、いかにとだに、おとづれも、支給はぬは、いと思はずにうらめしくなむ。このけしき、さりと見過しがたくは、おぼさるるものをとは、思ひやり聞えさせ、さるしめすやうに、いとうひうひしき口には、何事もいはれ侍らず、筆のきりとるはかせだに侍らで、とりつくるひ侍らむやうも侍

らねば、思ひ給ふるほどの心も、ただ、おしこめてなむ。そこには、いかに見せころわする。心ふかき言のは、多くものし給ふらむ。一つ二つたまはせよかし。さてなむ、せば、き庭の雪のひかりもくははりて、友なきけさのさうざうしさも、なぐさめ侍らむいでや、かく聞えさするも、もとよりあやしき鳥のあとの、けさは、いとと筆のさきまみこほりて侍れば、御らんじわくかたも侍らずや、あなかしこ。

又、翁の著書、きはめて多し。その數、五十部に近く、卷數、百三十餘卷もあるべしとぞ。今、そのおもなるものを掲げて、國文學者の參考に供せむ。

紫文要領二卷。寶曆十三、年六月著。こは、源氏物語の、他の物語書にすぐれて、

その心も、詞も、いごめでたき事、及び、この書につきて先輩の見解を誤れる事ごもを、くはしく論じた。ただ、されたる翁、多年の研究に成れるものなり。されば、その説くところ、諸抄の説と、雲泥の相違ありて、この物語を見る者の、必ず一讀すべき書なり。



石上私淑言二卷同年 著 此は、歌といふ語の解釋より、すべて、歌の事を解き盡されたる書にて、歌よむ人の、業となるべきものなり。

手枕二卷同年 著 此は、源氏物語の文体に似よせて、六條御息所の事をあつるせる書なり。

古今選五卷同年 著 此は、歌よみならふ者のために、古今集をはじめ、廿一代集の中より、殊に、めでたき歌のみを抜き集めたる書にて、常によみうかべて、そのすがた、こゝばを習はしめむことなり。

國歌八論同斥非の評明和五年 著 此は、荷田在滿國歌八論を著して、歌道の事を論ぜしを難じて、大菅公主國歌八論の斥非といふ書をものせり。その兩者互に得失ある所を、標記傍書せられし

ものにて、歌道の古學に益ある書なり。

家譜修撰一卷明和八年 著 此は、翁の同族本居林之右衛門の家、翁の家に傳はれる系圖及び、そのほか、兩家に傳はれる古書にも

によりて、その祖先の由來をたづね、また、翁の考按を書き加へられたる書なり。

直毘靈一卷同年 著 此は、道といふ事の論なりと註して、我皇大御國の道の本意を、本文に述べ、それに、自ら、古人未發の见解を以て、註せられたる書なり。

紐鏡同年 著 此は、てにをはの定格を、圖に示したる書なり。

菅笠日記二卷安永元年 著 此は、この月、吉野の水分の社に詣でられしついでに、ここかしこ、大和の國をめぐられし時の紀行文なり。



字音假字用格一卷。安永四年一月著。これは、皇國の音のあるしに、漢字を借り用ゐるにつきては、その字音の然る所以を、明らかめさせざれば、書なり。

馭戎慨言四卷。安永七年二月著。これは、いにしへより、近く天正慶長の頃まで、漢土と通信ありし事ごもを、年を追ひて、あるしたる書にて、

かの國の書の妄言を正し、また、御國の書にも誤多く、かつ、内外の差別正しからで、頗る國体を損ずるものあるを、辯じ、以て、尊

内卑外の理を、明かに、論ぜられたるものなり。

萬葉集玉の小琴一卷。安永八年十一月著。これは、萬葉集中の解き難きふしご、

よみ難き所ごを、考へ明されし書なり。

詞の玉の緒七卷。同年二月著。これは、言語のいひざま、つかひざま、その結びのてにをはを、辯明せられし、めでたき書なり。

眞曆考一卷。天明元年九月著。これは、未だ異國の曆法の渡り來ざりし以前、

上古月日の定めを考へ、あるされし書なり。

漢字三音考一卷。天明五年著。これは、古言の正音を明かにせむがため、

諸外國の音韻より、禽獸萬物の音韻までも、論ぜられたる書なり。

呵刈葭一卷。天明七年一月著。これは、難波なる上田秋成が、なにくれご、翁の

論を難破せむごしたるを、翁の悉く、こを討ち返されし書なり。

國號考。同年。これは、國號のいはれを、くはしく、考證せられし書なり。

玉鉾百首詠一卷。同年。これは、神道の尊く、すぐれたる事を知らざ

る、なべての世の人を、ささごし、また、古學をする人のいふ事も、古

意にたがへるが、多きを、なげき、いさごほりて、をしへがてらに、

意にたがへるが、多きを、なげき、いさごほりて、をしへがてらに、



よまれし歌ごもなり。その後、なほ、その委しきを示さむがため、  
 大平氏の玉銚百首解も出でたり。  
 神代正語三卷寛政元年五月著は、神代の卷を、古事記と書紀とを照し  
 合せて、あるされたる書にして、事の趣意、あまり異ならぬは、專  
 ら、古事記の方により、同事の異なるは、二典別別に、それを對照  
 せしめたり。また、古事記にもれたることは、書紀を取り、また、一  
 つ二つ、二典にもれたるここの、他の古書に見えたるをもあげ  
 られたり。さて、神名、地名等、すべて、物名は、文字にてあるして、一  
 一、訓註を附し、清濁のさだめ、最も、嚴重なり。初學者、先づ、この正  
 語をよみ、口なれて後、かの古事記傳をよまば、いさたよりよか  
 らむ。

新古今集美濃家苞五卷同折添三卷寛政三年四月著は、美濃の大矢重

門かといへるが、翁の許もとに來り居て、この集の歌の心こころばへを細こまや  
 かに問とひ尋たねたるに、翁の諭さとし教おしへられし趣旨しゆいを、その國くにに歸かへ  
 らむ家いへづこに、書かきて得えさせよと乞こへるがままに、與あたへられし  
 書となり。その時とき、折かり添まへも、それにそへられしなり。  
 玉たま霰あられ一卷寛政四年著は、歌うたならびに、文章ぶんしょうの詞ことばに、近世きんせいおしなべて、  
 義理ぎりをとり違たがへ、或あるひは、つかひざまを誤あやり、或あるひは、いやしき詞ことばなど  
 の多おほかるを、一一、正ただし教おしへられし書しよなり。  
 玉たま勝かち間ま十五卷寛政五年一月著は、翁おきなの隨筆ずいひつにして、折ちぢにふれ、事ことにあた  
 りて、見みもし、聞ききもし、讀よみもしたる、くさぐさの事ことごもを、年頃としころ  
 筆ふでのまにまに、書かきすさまれたるが、積つみて、十五卷かんとなりたる  
 なり。されば、道みちにかかれる教おしより、花紅はなみづ葉ぢの風流ふうりゆう、さては、土俗どぞくの  
 風習ふうじゆ等、何なんと定さだまりたる事ことはなけれど、文章ぶんしょういさめでたく、必かならず



讀みて味ふべき書なり。

出雲國造神壽詞後釋二卷。同年。こは、この壽詞の詞も調も、いご

古く、他書になき神代の傳へも残りて、いごめでたき古文章な

れば、縣居大人の祝祠考に、深くめて尊み、こを鑿としてこそ、祝

祠をはじめ、よろづの文をも書きつべけれご、若るされしより、

世の人、かつがつ、この詞を知りそめたるを、翁のいよいよ尊ば

れて、そのあまりに、前の考の誤を正し、その發明の新説を志る

されたる書なり。

大祓詞後釋二卷。寛政七。こは、縣居大人の祝祠考に、誤られたる

説もあり、また、いまだしき考もあれば、こて、そを辨へたとして、

自らの新説をも、書き加へられし書なり。

天祖都城辨の辨一卷。寛政八。こは、或人の天祖都城辨とて天照

大御神の都を、大和の國なり、こいへるを辨じ、さて大御神の都

は、高天原にあるよしを正されし書なり。

源氏物語玉小櫛九卷。同附録一卷。同年。こは、松平康定朝臣の乞

はるるままに、源氏物語の、こけがたく、よみがたきふしを明さ

れたる書にして、物語の大意、年立、系圖等も附したり。

古今集遠鏡六卷。寛政九。こは、雅言に、俗言をあてて、古今集の歌

を解かれたる書にして、容易に、その歌の意をさとり得べく、示

されたるなり。

家の昔物語一卷。寛政十年。こは、本居家の先祖より、代代のありさ

ま、また、翁の生れし時より、今年、この書を書きをへしまでの事、

また、息男、息女等の事、ごもまでも、いごねもごろに、書きあるさ

れし書なり。



初山踏一卷同年十 月著 此は、初學者に、學びの道のすちをわけて、ね  
もごろに解き示されし書なり。

鈴の屋文集歌集同年 著 此は、これまで、翁の書きごこのへられし

ものにて、七卷なり。これより後、ものせられしをば、翁の死後に  
集めしが、二卷あり。合せて、九卷となれり。

吉野百首詠寛政十一年 著 此は、この年、吉野の水分の社に詣でられし

時の歌ごもなり。

古訓古事記三卷同年 著 此は、古事記の、古昔の訓法を正して、そを

片假名もて、本書の傍に附せられたる書なり。

歷朝詔詞解六卷寛政十二年 著 此は、續日本紀の宣命を、くはしく、説明

せられたる書にて、古文に志す者の、必ず、一讀すべきものなり。

神代卷警華山蔭一卷同年 著 此は、日本紀神代卷を見む人のため、

その心得を示されたる書なり。

地名字音轉用例同年 著 此は、漢の字音を借りて、國名に用ゐる、牟邪

志の邪志に、藏の字の音を轉じ用ゐて、武藏と書き、佐加良に、相

樂と書くなごの所以を明されたる書なり。

眞歴考不審辨一卷同年 著 此は、さきに著はされし眞歴考を、尾張

の某が難じたるを、辨破せられし書なり。

臣道一卷同年 著 此は、或人の、今の世に、古の道もて、君に仕へ、國を

治めむ心は、へはいかに、問へるに、答へさごされたる書なり。

言語活用抄一卷同年 著 此は、言語の活用の格式、また、雅言俗言の

差別をわかち、教へられしものにて、本朝語學の原書ごもいふ  
べき書なり。

別遺言書一卷同年 著 此は、むねご、そのみまかられし後の葬式ご、



祭祀の事を記されしものなり。  
枕の山一卷同年著。こは、このごろ、櫻の歌を、三百首あまり詠まれしを集めて、一卷かんとなしたるものなり。  
翁は、かくしも、學のために、身をくだき、道のために、心をつくされたれば、その名聲、いよいよ高く、四方よりたづね來りて、をしへ子となれる者、その門人帳もんじんてうにあるせるは、四十餘國の人にして、合せて、四百九十人に及びり。されど、位高きかたがたの、それに洩れたるが多ければ、みな合せては、六百人ばかりもありしなるべしこそ。そのうち、

田中道磨 横井千秋 石塚龍磨  
植松有信 藤井高尙 鈴木朗  
衣川長秋 殿村安守 殿村常久

長瀬眞幸 夏目襄麿 服部中庸

上田百樹 大館高門 三井高蔭  
萩原光克 渡邊重名 村田春門  
市岡猛彦 山本孝正 橋本稻彦  
村田元庸 小篠敏 田中大秀  
渡邊堅石 加藤磯足 高林方朗  
春柳種信 城戸千楯 興福院春登  
平田篤胤 和泉眞國 稻葉通邦  
伴信友 齋藤彦磨 黒澤翁滿

なごを、おもなる人こそす。かくて、翁の本志をつぎて、大道を祖述し、以て、國文學の泰斗と仰がれしは、平田篤胤翁その人なり。篤胤翁



は、宣長翁死去の後、その墓前にいたりて、その弟子となり、遂に、その名をあげられたる人なり。

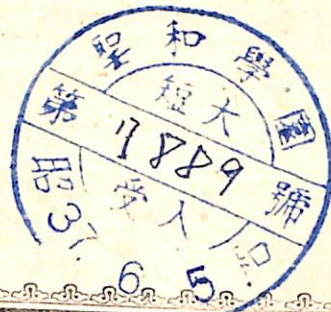
それかくの如く、その死後にすら、かかる名家の慕ふところなれり。いかに、翁の學說、一世を風靡したるかを思へし。ただに、これのみならず、翁の國文學を唱へられてよりは、四方の士、争ひ起りて、あるひは、著書に、あるひは、議論に、あるひは、事業に、大に、大義名分のあるところを明かにし、遂に王政維新の大功を奏し、以て、今日に至れるは、翁の力、最も多きに在る。これ、すでに、卷初に述べたるが如し。さればにや、明かに治る御代の御めぐみ、勅使を山室山にたてられて、それを祭らせ給ひ、また、かしこくも、從四位を贈らせ給へり。翁も、し地下に知るあらば、實に、感泣に堪へざるものあらむ。あはれ、翁のいさをしは、山室山の、ごこしなへに高く、かくばこ

き名は、千代かけて、八千代かけて、御墓のさくら花と共に、にははむ。



少年讀本 第四拾八編 本居宣長 終





わがをしへ子にいましめおくやう

本居宣長

われにまたがひて物まなばむともからも、わが後に又よきかむがへのいで來らむには、かならずわが説になづみそ。わがあしきゆゑをいひて、よき考へをひろめよ。すべて、おのが人を教ふるは、道を明かにせむとなれば、かにもかくにも、道をあきらかにせむぞ。我を用ふるには、ありける。道をおもはで、いたづらに、われをたふとまむは、わが心にあらざるぞかし。

(たまかつま)

明治三十五年五月七日印刷  
明治三十五年五月十日發行

本居宣長

定價金拾參錢

著者 落合直文

發行者 大橋新太郎

印刷者 水谷景長

印刷所 會社 博進社工場

東京本郷區丸山福山町六番地  
東京小石川區久堅町百八番地

著作権  
所有

發兌元

東京日本橋區本町三丁目

博文館



# 少年讀本

全部正  
五拾册 價

一册金十三錢●六册前金七十錢  
十二册前金一圓三十錢●廿四册  
前金二圓五十錢●郵稅一册四錢

我邦近古の英傑碩學名士賢婦の事蹟を詳録す一册一人を傳して漏さず作者は皆當代知名の大家に囑し文辭は明暢にして讀み易く挿繪亦た精妙にして其文を補ふ以て立志修身の摸範たらんことを期す

- 全
- 第一編 高島秋帆 福地櫻痴君著 第廿七編 荻生徂徠 內田魯庵君著
  - 第二編 白河樂翁 公中村秋香君著 第廿八編 松平伊豆 森山吐虹君著
  - 第三編 河井繼之助 戶河殘花君著 第廿九編 中江藤樹 國府犀東君著
  - 第四編 三條實美 公依田學海君著 第三十編 島津齊彬 公春山鶴峯君著
  - 第五編 曲亭馬琴 壺庭篁邨君著 第卅一編 高野長英 于河岸貫一君著
  - 第六編 井伊掃部頭 巖谷小波君著 第卅二編 橋本左內 桐生悠々君著
  - 第七編 山田長政 遲塚麗水君著 第卅三編 釋月性 于河岸貫一君著
  - 第八編 錢屋五兵衛 桐生悠々君著 第卅四編 平野國臣 白河鯉洋君著
  - 第九編 春日局 岸上質軒君著 第卅五編 熊澤蕃山 幸田成友君著
- 發兌

# 部 目 次

- 第十編 水戸烈公 野口河北君著 第卅七編 野中兼山 北村香陽君著
  - 第十一編 桐野利秋 春山鶴峯君著 第卅八編 大鹽平八郎 堀紫山君著
  - 第十二編 藤田東湖 大和田建樹君著 第卅九編 佐久間象山 塚本澁柿園君著
  - 第十三編 伊能忠敬 幸田露伴君著 第四十編 小栗上野介 勢多章之君著
  - 第十四編 新井白石 武島羽衣君著 第四十二編 阿部伊勢守 熊田葦城君著
  - 第十五編 水野越州 中村桂軒君著 第四十三編 松尾芭蕉 國府犀東君著
  - 第十六編 池野大雅 田山花袋君著 第四十四編 石川丈山 岡嶺雲君著
  - 第十七編 木內宗吾 松原廿三階堂君著 第四十五編 德川吉宗 草野正義君著
  - 第十八編 西郷隆盛 川崎紫山君著 第四十六編 烈女お藤 藤本藤蔭君著
  - 第十九編 阪本龍馬 坂崎紫瀾君著 第四十七編 林子平 松居松葉君著
  - 第二十編 橫井小楠 大野洒竹君著 第四十八編 堀校 長谷川天溪君著
  - 第二十一編 貝原益軒 石原笠堂君著
  - 第二十二編 渡邊華山 渡邊霞亭君著
  - 第二十三編 中濱萬次郎 石井研堂君著
  - 第二十四編 近衛忠熙 公勢多章之君著
  - 第二十五編 間宮倫宗 笹川文學士著
  - 第二十六編 周布政之助 榎川君著
  - 第二十七編 雲井龍雄 玉木椿園君著
- 續刊目次
- 第四十九編 高田屋嘉兵衛 中村冷露君著
  - 第五十編 大槻磐水 大槻如電君著
- 館 文 博



每編 讀切

# 世界歴史

- 第一編 釋孔 文學士 高山次郎君著 横山大觀君畫
- 第二編 耶比 文學士 吉國藤吉君著 中村不折君畫
- 第三編 漢比 文學士 上田敏君著 中村不折君畫
- 第四編 漢尼 文學士 笹川潔君畫 小坂象堂君畫
- 第五編 漢高 文學士 大町芳衛君著 渡邊審也君畫
- 第六編 漢祖 文學士 坂本健一君著 北運藏君畫
- 第七編 漢高 文學士 三浦菊太郎君著 北運藏君畫
- 第八編 漢高 文學士 島田文之助君著 北運藏君畫
- 第九編 漢高 文學士 笹川種郎君著 渡邊金秋君畫
- 第十編 漢高 文學士 桐生政治君著 白瀧幾之助君畫
- 第十一編 漢高 文學士 岸崎昌君著 中村不折君畫
- 第十二編 漢高 文學士 佐藤信安君著 宮川春汀君畫
- 第十三編 漢高 文學士 福山義春君著 山中古洞君畫
- 第十四編 漢高 文學士 安東俊明君著 高橋松亭君畫
- 第十五編 漢高 文學士 久保天隨君著 中村不折君畫
- 第十六編 漢高 文學士 近松宇太郎君著 中村不折君畫
- 第十七編 漢高 文學士 幸田成友君著 中村不折君畫

方今世界歴史の書其數少からず或は繁に失し或は簡に流れ克く中庸を得以て少年子弟家庭の讀物として適格のものに眞に罕なりとす我世界歴史は則ち此缺漏を補はんが爲めに其目的素より史學的研究にあらざれば其方面より觀察するときは或は非難すべき點多からん少年諸君の同伴として家庭の讀本たらしめんこの希望は全く達し得たること信じて疑はざる處なり今や三十六編を累刊し先づ茲に世界歴史を完結上下幾千年の長歴史語りたき事其數限りなしと雖も今暫く筆を止め他日機あらば再び諸君に見んことを

東京 橋本 區 發元兌

# 譚全部完成

密書 挿入

- 第十八編 王陽明 文學士 白川次郎君著 宮川春汀君畫
- 第十九編 王陽明 文學士 酒井小太郎君著 中村不折君畫
- 第二十編 王陽明 文學士 十時彌君著 山中古洞君畫
- 第二十一編 王陽明 文學士 中村可雄君著 中川葦舟君著
- 第二十二編 王陽明 文學士 中村可雄君著 中村不折君畫
- 第二十三編 王陽明 文學士 土井晚翠君著 宮川春汀君畫
- 第二十四編 王陽明 文學士 永井惟直君著 中村不折君畫
- 第二十五編 王陽明 文學士 太田三郎君著 遠藤耕溪君畫
- 第二十六編 王陽明 文學士 松岡國男君著 宮川春汀君著
- 第二十七編 王陽明 文學士 赤松紫川君著 宮川春汀君畫
- 第二十八編 王陽明 文學士 布施謙太郎君著 宮川春汀君畫
- 第二十九編 王陽明 文學士 高木尙介君著 宮川春汀君畫
- 第三十編 王陽明 文學士 名尾良辰君著 遠藤耕溪君畫
- 第三十一編 王陽明 文學士 森山守治君著 宮川春汀君畫
- 第三十二編 王陽明 文學士 谷野格君著 佐藤磐水君畫
- 第三十三編 王陽明 文學士 中内義一君著 山中古洞君畫
- 第三十四編 王陽明 文學士 柿山清君著 富田秋香君畫
- 第三十五編 王陽明 文學士 中大路正雄君著 梶田半古君畫
- 第三十六編 王陽明 文學士 熊谷五郎君著 水野年方君畫
- 第三十七編 王陽明 文學士 三好愛吉君著 佐藤磐水君畫

正價 ● 壹冊金十三錢 ● 十二冊金壹圓三十錢 ● 二十四冊金貳圓五十錢 ● 三十六冊金三圓六十錢 ● 郵税一冊金四錢宛 ● 着金次第送本す

本町三丁目 博文館



櫻所河干岸一貫君撰

日本女子之美編

全貳冊

上卷出來發賣  
下卷嗣出  
正價六十錢  
郵稅十錢

口極彩色木版二頁大四冊  
●皇后陛下御尊影  
●皇太子妃殿下御尊影  
桂舟、華村、永洗、年方四畫作  
寫真銅版色刷  
寫真銅版色刷

此書は中村陽齋の慶元以後明治の初に至るまで我國賢媛節婦三才畧の七部に分ち本邦古來の良風美俗たる婦教の實録として、且つ文章暢麗にして、且つ女子風教の紀正を促すと急あり本書の上梓せらるゝもの實に明代の鑑と云ふべし

女訓評釋

全壹冊和裝菊判上製紙數四百頁  
正價金六拾錢郵稅金拾錢

- 目次  
●女今川 ●女實語教 ●女庭訓 ●女訓孝經 ●女大學  
●女中庸 ●女小學 ●女孝經 ●女誠 ●女訓 ●女範

東京日本橋區本町 博文館 發兌元

受驗問答叢書

次目

- 第一編 新撰日本地理問答
- 第二編 新撰世界地理問答
- 第三編 新撰東西洋歷史問答
- 第四編 新撰日本歷史問答
- 第五編 新撰漢文問答
- 第六編 新撰算術問答
- 第七編 新撰代數問答
- 第八編 新撰幾何問答
- 第九編 新撰物理問答
- 第十編 新撰化學問答

武田櫻桃四郎君編

(第三編近刊)

新世界地理問答

全壹冊洋裝袖珍  
紙數三百餘頁  
正價金貳拾錢  
郵稅金四錢

此書は諸官私立學校受驗者の便利を計りて編纂したるものなるも編者は又受驗者ならざる少年が地理研究の一資料たらしめんが爲め一貫すれば又一部の地理書たるに適する様編みたり十九世紀以來に於ける地理上區劃の變遷は此書の主眼にして統計其他凡て最近の調書に依れり受驗者ならざる人も試みに一本を購ふて之を机上に供へ給らは益する此亦極めて多らん

- 第一編 新撰日本地理問答
- 第二編 新撰日本歷史問答
- 第三編 新撰和英文典問答
- 第四編 新撰會話及作文問答
- 第五編 新撰法律及經濟問答
- 第六編 新撰商業要項問答
- 第七編 新撰農業要項問答
- 第八編 新撰工業要項問答

- 次目
- 第十三編 新撰動物及植物問答
  - 第十四編 新撰天文問答
  - 第十五編 新撰地質問答
  - 第十六編 新撰礦物及地質問答
  - 第十七編 新撰生理及衛生問答
  - 第十八編 新撰倫理及教育問答
  - 第十九編 新撰心理及論理問答
  - 第二十編 新撰和英文典問答
  - 第二十一編 新撰會話及作文問答
  - 第二十二編 新撰法律及經濟問答
  - 第二十三編 新撰商業要項問答
  - 第二十四編 新撰農業要項問答
  - 第二十五編 新撰工業要項問答

東京日本橋區本町三丁目 博文館 發兌元



# 依田學海先生閱

松林伯圓(東玉)最後之講演  
松林若圓筆記

(製本既成)



菊全壹冊  
紙數三百  
餘頁頗美本  
正價卅五錢郵稅六錢



口 ● 極彩色木版菅公訣別の圖……………山中古洞畫伯筆  
繪 ●●●●● ● 京都北野天滿宮 ● 大阪天滿天神宮 ● 東京龜井戸天滿宮 ● 筑前太宰府天滿宮 ● 全飛梅 ● 講演者松林伯圓及全若圓肖像(以上眞眞銅版摺)

本年は菅公一千年に相當するを以て都鄙至る所盛に祭祀を行はる於茲本館は講演家の泰斗松林伯圓氏(東玉)をして菅公一代記を演せしめ特に依田先生の校閲を経て之を世に公にす是れ伯圓氏最後の講演にして全編之を松海櫻の三卷に分ち叙述縱横慷慨切實讀者をして喜憂萬感の情に堪へさらしむ眞に是れ近來稀有の演史なり請ふ續々御愛購あらんことを

發兌元 町本京東 館文博